
生まれ変わっても負け犬

爪陽二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生まれ変わつても負け犬

【NZコード】

N7659Q

【作者名】

爪陽一

【あらすじ】

魔法不能者。人々の生活の根底に魔法といつものが存在する世界で、その烙印を背負つてしまつた少女。

その内側は、負け犬人生が染みついた、こつちの世界のもので

脳内無双な敗北主義者の主人公視点で語られる、学園ネガティブコミカルファンタジー。

(1) プロローグ 引きこもり負け犬の選択（前書き）

隨時、文章の微修正を行なつております。
誠に申し訳ありませんが、ご了承くださいませ。
感想、批評、御待ちしております。

(1) プロローグ 引きこもり負け犬の選択

負け犬、という人種を「存じだらうか。

それを端的に言葉に表すならば。

敗北者。

敗残者。

脱落者。

社会の落ちこぼれ、殻潰し、惨めな落伍者、人生の失敗者、屑、出来損ない、出来損い。

何とも耳に痛い言葉の羅列である。

ところで。

これの恐ろしいところは、一旦墮落してしまつと、這い上がることは困難を極めるということだ。

よじ登つても、よじ登つても、断崖絶壁。

這い出しても、這い出しても、泥濘底無し沼。

そのうち、足を引っ掛ける窪みすら欠け落ちて。

そのうち、体を支える砂泥すら沈み落ちて。

いざ、奈落の底へ真っ逆さまの運命。

こうなつたらもう足搔かない。

足搔けない。

自由落下の法則を遵守。負け犬は、基本的に数ルルの暴力には素直な人種なのだ。

落ちて落ちて。

落ちて落ちて落ちて落ちて落ちて墮ちて墮ちて

その奈落の底にも、また穴があるとは、さすがに思わなかつたけ

その日も目覚めは、ノックの音だった。

乾いていて、尚かつ下腹に響くような、不快な衝撃音である。聞くだけで吐き気がするので、お得意の魔法とやらで、爽やかかつ軽快なインター ホン音でも鳴らせばいいのに。

ともかく、その音の目覚め効果は抜群ではあった。すでに意識より先に、私の身体は行動を開始している。

習慣とは、しみじみすごいものである。人体の神秘。

ここでも同じ作りをしているがどうかは知ったことではない。

しおぼくれた視界をこじ開け、やたらとゴージャスチックな布団を跳ね除けて体を起こす。窓から横向きの日光が差し込んでいる。早朝。

可愛らしい女もののスリッパ（特注品）を履き、床に敷かれた、金色の装飾があしらわれた赤い絨毯を闊歩し、間もなくやたら鈍重な凸凹扉の前に到着。

がちゃり、と鍵を閉める。

「あ、ちょっと、お嬢様！？」

扉の向こうから、何やら声が聞こえるが、きっと空耳であろう私はそう判断して、復路を経てゴージャスベットに再度潜り込む。ゴージャスとはただ見た目だけでなく、それに見合った素材を使っているため、抜群の肌触りである。寝転がれば、間もなく安眠間違いなしなのだが。

「お嬢様！ 鍵を外して下さい！ 今日は入学式の日ですよ！？」

お嬢様！』

『空耳と共に、不快な衝撃音が再開された。『ンンンンンン』と連續的な音は下腹に断続的にダメージを与える。

……やはり、将来的にインター・ホンを設置すべきだと思つ。いやむしろ私が作つても可。明後日辺り。

と、そのうちコンコン、だつた音がドンドン、にレベルアップする。衝撃も伴つてグレードアップである。

空耳 メイドの声はまだ続く。

「お嬢様！ おじょーさま！ 今日はこんな馬鹿やつてる場合じやないんです！ 初つ端からサボつてどーするんですか！」

このままガンガンにクラスチョンジする確率は、統計上5日に1回である。一昨日がそれだったので、本日の安心度をつけるなら上位から2番目であることは確実

「お・じょ・う・さ・ま！？ いい加減にして下さいよ、欠席とかしたら、なんて言われると思つてんですか！ 主に私が！」

ガンガンと、容赦なく扉を蹴り飛ばす音が聞こえてくる。

どうやら今日は厄日らしい。今力ギを開けたら、すつゞい不幸な事に遭遇するのは間違いない。擧げるなら、ものすつゞい形相をした凄絶怪力鉄メイドに、首根つこ引っ掴まれて、着替えという名の強姦されるなど。

そういうわけで、本田あの扉の鍵が開かれることは決してないだらう。

そうと決まれば、この騒音と衝撃の中、どう紛らわすかの思考錯誤タイムである。私は布団を頭までかぶり、まずは物理的抵抗を試みることにした。

「あの、いや本当、今日はまじやばいんですよおじょーさまー。メイド長にも釘押されてるんですよ！？ 首がかかつてるんです！ こんなどーでもいい事に首がかかつてるんです！ ああ、もうつ、この係りになつてから私のメイド人生滅茶苦茶ですよー。ばつぱきばきの全身全霊粉微塵ですよー。こんな不幸な私に、少しでも同情し

てくれる程の良心の呵責かじやくを持つてたりするなら、開けちゃつてもいいんじやないでしょうか！？ いや、開けて下さいお願いします！ お願いしますって言つてんだろココー！」

……だがしかし、とてもじゃないが睡眠状態に入るのは不可能だつた。

かなり焦つてゐるのか、若干可哀想なほど本心を晒け出しながら、扉を蹴り続ける爆音が部屋に響き渡る。廊下にも響いてゐるのは間違いない。

ちなみに、扉は魔法で強化された木材を使用しているため、いかに凄絶怪力メイドといえど、蹴り破るのは不可能である。一応。と言いつつも、実は凄絶怪力鉄メイド命名の由来は、その無駄に頑丈な強化木材をへこませたことに由来しているのだが。

恐るべし、凄絶怪力鉄メイド。壮絶怪力鉄メイドにバージョンアップする日も近いと見た。

まあ、凄絶怪力鉄メイドのことはさておき。 本日の厄を強制回避するためには、まだしばらくの間は我慢するしかないらしい と思つた矢先。

何の前触れもなく。

ふと、全ての音が止んだ。

「…………え？」

予想外の出来事に、思わず口から疑問がこぼれる。

突然、本音ダダ漏れのメイドの恨み言と、ドアを蹴る音が消え、部屋に朝の静寂が戻つていた。

「…………」

布団から頭を出し、なんとなく耳を澄ましてみるものの、扉から、特に聞こえてくるらしき音は無く。

あきらめたんじやないの？

いや、それは無いだろう。頭によぎつた可能性を瞬時に却下する。

統計上、扉を蹴り始めた日は、結構な時間粘る」ことが証明されているのだ。過去1年間のデータより。

だったら、つまり、これは一体どうこいつなのか

「……ロゼ？ どしたの？」

確かめるために、私はもつとも手早く、原始的な手段を取ることにした。

ベッドから降りて、扉に歩み寄る。

「おーい

呼びかける。

「ロゼット・アフティ？」

フルネームで呼んでみたりする。

「……凄絶怪力鉄メイド？」

恐る恐る、あだ名を言つてみたりするが

「…………」

反応無し。

そういうしてゐうちに、扉のすぐ手前まで来てしまつていた。

扉に耳を添えてみても、何も聞こえない。

全く、聞こえない。

朝、この屋敷はメイド達が、慌ただしく駆けずり回る足音が廊下を揺らし、換気換気と、全ての窓をオープンする為、風の音が聞こえるはずなのだ。

ならば。

やはり、おかしい。

異常。

これは異常である。

異常。異変。変異。異質

「…………魔法…………！」

一瞬の迷い後。

本日、開けないと誓つた扉を、今度は内側から蹴破るよつに開け

る。

叫んだ。

「ロゼットー。」

その時の感情は、分類するならば、恐怖のカテゴリーに入っていたことだろう。

私は、ただひたすら、この異常な沈黙を打ち消したかった。そして。

「やあ、フエオちゃん？」

…………久しぶりに聞く、どこか捉え所の無い、のっぺりとした声。

気が付いた時はもう遅く。がつしりと羽交い絞めされて、無理やり何かを嗅がされ、私の意識は地へと落ちていった

本日二度目の目覚めは、なかなか類を見ない起床だった。まさに希少。……なんちゃって。

現実逃避はさておき。

再々度、状況を確認してみよう。

屋敷の一室である。金の模様つき赤絨毯。凸凹の深い色合の木製扉。汚れひとつ無い真っ白な壁。外開きの木枠窓。私の部屋と同形である。だが、似たような部屋はいくらもあるので、そのどれかは分からぬ。唯一、判断素材にできそうな窓の外を見ようにも、立つて、そこまで移動することが出来ない。なぜなら。

先程、意識的に視界に入れないようにしてきて、自分の体を再々

度見やる。

縛られている。

何度見ても、振り向をても見ても、視線を逸らしても、完全無欠、一片の「冗談もなく。

純白のパジャマの上から、か細い体を這いつゝに縛られている。
「…………なに、これ…………」

底知れぬ不安。身の毛もよだつ悪い予感に、咳いた声もかすれていた。

「一体これは、なんなんだろう。

一体これから、どうするつもりなのだ？

縛られていることが問題なのではない。いや、もちろん縛られていることも問題なのだが。

この、動きを制限する縛。その縛り方。

名前は知らない。忘れた。だが用途ならよく分かる。ええ、よく分かる。元男だもの。前世男だもの。

「なにこれって、またまた。フヨオちゃんたら、相変わらずむつつりさんなんだからあ」

先程の咳きに返答したのは、気絶する寸前に聞いた声。

声の聞こえた方向。いつの間にやら傍らに立っていたのは、久しぶりに見る顔。

その顔を見て、安心したのか、もしくは怒りが再燃したのかとにかく、なんとか声は出そうだった。

久しぶりの再会。言いたいことは山ほどあるが、とにかく、先じて言わなければならないことがある
大きく息を吸い込む。大声を出すコツは、喉よりもお腹で声を出す感じ、と誰かが言っていた。

人生二度目にして、初めての実践。

思いつきり、今現在の思いの丈をぶちまけた。

「 実の娘に、なんでこんなエロかっくな縛り方してるんですか
つー?ー?ー? 」

「ゼエ、はあ……」

慣れないことをしたためか、はたまた運動不足の賜物か。私はや
や息を荒げながら、少しば叫んだ効果があるのかと、その人を睨み
つけた。

が、しかし、その人物は耳栓をしていた手をゆっくりと放しながら、
「じく涼しげな顔をしていた。「言いたいことはそれだけ?」と
でも言いたげだ。

……この憎たらしく飄々として捉え所の無いこれが、今私の母
親。旧家であるシュラップネル家六代目当主の妻、ゼノヴィア・シュ
ラップネルその人である。

ウーブがかつた長い金髪。一切の肌の露出を許さない、気品溢
れんばかりのドレスに、感情の読めない仮面。

さながら、金髪マネキンに観賞用ドレスを着せて、汚れが付
かないように全身ビニールカバーで覆つた感じ。

……ちゅうと言ひ過ぎだ。

とにかく、実に五年ぶりの再会。

「いやあ、逃げないよう縛りつとしたんだけど、可愛かったんで
思わず、ねえ」

……最低の再会シーンである。

「ねえ、じゃないでしょ?が。何の言い逃れにもなってないですよ

「 もう? でも、わたしだって、ちょっとは我慢したのよ? 本当
はもつとすこぐする気だったんだからあ」

変わらない表情で、おばさんちくへい、いやいやと手を振るお母
様。

……もつと、すこぐへ?

非常に不安になる要素の強い言語である。

「 ど、どつする気だつたんですか」

勇気を出して尋ねてみることにした。正直聞きたくないが、しつ
かり把握しておくと、後々対母親戦で役に立つかもしない。
私の問いに、お母様は満面の笑みを浮かべた。表面だけの、ぞつ
とする笑みである。

両手で拳を作り、それを顎につけて、可愛く首を右斜めに45度
に曲げた。いわゆるふりつー♪ポーズである。吐き気がした。

そして、その次の言葉のショックで、その吐き気が木端微塵
に吹き飛んだ。

「 裸に直接?」

「本当に、ちょっと我慢してくれて非常に幸いで
す」

「 じこの世界に五年ぶりに再会した娘を裸に剥いだ拳句に縛る
母親がいるというのだろうか。

聞かなければよかつたという後悔。とりあえず、どうひらこじらこ
のデンジャラスお母様の前では、油断も隙も見せてはならないとい
う今後の人生の教訓は、不動の地位を確立していた。

「 やる気満々だつたんだけどねえ。意気揚々とボタンを外してたら、
ロゼがフェオちゃんと全く同じセリフ言いながら、ものすつごい形
相で止めてきたもんだから、泣く泣くやめることにしたのよねえ」

そして逆に、思わぬところで思わぬ人物の株が急上昇した。

.....すみません、これからはちちゃんと名前で呼ばせていただ
きます.....

それにしても、確かにかなりギリギリセーフだったらしい、前開きの上着のボタンは、全て外れ、大きくなっていた。

若干ずらされているものの、下着を着けているので、胸が全て露出しているわけではないが……

垣間見える白い肌と、縄で強調されている小ぶりな胸がなかなか扇情的だった。

「あらあ、フエオちゃんみたい、もしかして縛られるの気に入つた？ そんな顔真っ赤にして」

「えっ？」

口に手を当てる、「あらまあ」とこつた風にニヤニヤじと面白がるような目が私を見ていた。

……まずい。

「ち、違います！」

私は慌ててかぶり振つて、「そんなことよつ」と言つて、瞬時に話題をすり替える。

そう。

少々脱線してしまつたが、そんなことよりも、他にも言つたいことは山ほどあるのだ

改めて、母親の方に体を向き直る。

……なぜか、相変わらず縛られたままだけど……

「どうにづつもりですか、お母様！」ここでは魔法は禁止だつて言つたじゃないですか」

私はきつ、と睨み付ける。

推測が正しければ、あの不自然な無音は魔法によるものなのだろう。他の場所からあの部屋に一切の音が入らないようにする。あの

時は気付かなかつたが、恐らく窓からの音も消えていたはずだ。

魔法とやらは、そんなことも出来てしまつ

だが、その追及にお母様は、悪びれることなく少し首を傾げただけだつた。

「ん？ そうだつけえ？」

「そうだつけて……」

私はこの惚けているつもりなのか、母親の言葉に絶句した。

忘れているわけがない。そもそもこれを発案したのはこの人なり、許可したのもこの人なのだ。

「まあ、そんなことはどうでもいいじゃない。それより、問題はフエオちゃんの方じやないの？」

……どうでもいい？

精一杯眼つけているであらひ、私に気付いているのか、気付かぬふりをしているのか。

ここにきて、私は確信していた。わざわざこの道化がここに来た、その理由。

だが、だとしても、分からぬ。

一体なぜ？

今更。

こんなことは今更である。

「今日は、大事な大事な、だーいじな、コンスタンティア魔道学院の入学式よ？ それなのにななたは懲りずにまた引きこもつて。メイドの手を煩わせて」

それを許したのは、誰だ。

「いつまでそうしてゐつもりなの？ そつやつて現実逃避したつて、なーんにも変わらないし、なーんにも始まらないのよお？ それに、これは代々、シユラップネル家当主になる者の

「嫌だつ！」

「気付けば。

私は、絶叫していた。

聞きたくないことを、望まないことを、ありえない未来を、拒絶した。

「絶対に嫌だ！」

ぴくりと。

お母様の頬が引きつるのが見えた。化けの面が剥がれようとしていた。

「そんな そんなものはベリルに……妹に任せればいいじゃないか！」

「……なんですって？」

ぴしりと また音が聞こえそうなほど、お母様の顔が豹変していく。作り物の親の顔から、使えない部品を見下す顔へと。だが、私の絶叫はまだ止まらない。たかが外れたように、言葉の波が溢れ出す。

溢れ出るまま、吐き出す。

「魔法不能者の私に、今更あんな化け物みたいなところに行けっていつの？ 初等も中等も、ろくに行つてないのに？」

魔法不能者。それはこの魔法が人間の生活の根幹をなしてい る世界において、圧倒的弱者だ。

そんな生まれつきの負け犬が、群れに馴染めるはずなど、ありは しない。そんなことは、前の人生で分かりきった事。

「それ以前に私は家を継ぐどころか、この屋敷から出ることすらま まならないんだよ！？」

この陸の孤島で五年間、私はずっと閉じこもっていた。むしろ生 まれてから11年間、少しでも頑張ろうとしたあたり、私はどうし ようもなく馬鹿だったのだろう。新しい世界に 新しい人生なら、やり直せるなんて。

「街じやろくに生活も出来なければ、どんな弱い魔物でも襲われたら死ぬしかない！ なんの力もない出来損ないの私に、一体どうしろっていうの！？」

結局証明したのは、負け犬は死んでも負け犬だってことだけ。もう一度と、惨めな思いはしたくない。もう一度も、惨めな思いはしたくない。

だから

「だから……もう……嫌……」「

全て。

一滴も残り残さず言い終えて

息を切らした私を待ち構えていたのは、憮然としたシユラップネル家当主の妻の顔だった。

見下ろしていた。

遠く遠く、高い所から、見下していた。

「言いたいことはそれだけかしら？」

今度こそ

冷たく、凍てついた声。

平坦。鋭く、まつ平らな感情。

「既に馬車と、荷物はメイドが用意してくれているわ。後はフェオドール、あなただけよ」

その言葉には、一切の容赦すらない。

冷たい刃のような瞳に、射られるような錯覚。

「嫌だと……言いました！」

たまらず、私は視線を下げる。

……恐らく、今私の姿は滑稽であろう。説教する母親の足元に縛られていながら、ヒステリックを起こしているのだ。

よもや滑稽以外の何物でもない。さうにここで泣いたら、滑稽にすらならなくなる。私は下を向いたまま、はっきりと意志を告げた。

「……絶対に行きません」

そして。

「そう」

と、お母様はあつさりと
「じゃ、あなた」

あつさりと、突っぱねた。

「あなた、勘当ねえ」

あつさりすぎた。

何の感情もそこにはこもっていない。平坦ですらない。

ただ事実を語つただけ。

ただ真実を喋つただけ。

だからこそ、理解するのには一瞬の間ががかかった。

「…………え？」

「だーかーら。勘当。クビ。シユラップネル家から、あなたを追い出すつていつてるの。いつまでも殻潰しを置いて置く程、あの人は甘くないわよお」

顔を上げる。見やつたその瞳に、刃のような冷たさはない。飄々

とした道化の、いつもの仮面をもう被つていた。

「か、勘当するって……」

勘当。追い出す。シユラップネル家から。

この魔法という、私にとつての化け物が取つ払われた温室から。

……仮面。五年前、私がその時の全てを、一度目の人生を諦めた際に作られた、母親の仮面。

一度は見捨てたはずの私に。

一度は情けをかけたはずの私に。

その母親は、今、実の娘にこう言つたのだ。

外でもう一度惨めに生き恥を晒すか、ここに命にすがるのを

止めるか、
選べ

(2) ひねくれ負け犬の初登校

負け犬とは、諦めることと見つけたり

「さつすがフエオちゃーん！ 分かってくれるって信じてたわあ」

負け犬。
それは敗北者。
それは敗残者。
基本的には親の権力には逆らえない人種なのだ。

つまり。

つまり、私は選択権などあるはずもなく。
つまり、私は拒否権などあるはずもなく。

「……いいから、早くこの縄を解いてくれませんか……」
再び、吐き気を催すぶつりこポーズで、取つてつけたようなはし
やぎ方をしている母親に、私は心底嘆息しながら懇願した。
いい加減痺れが酷いことになっている上に、主に元男として、こ
の状況は非常に精神的都合が悪いのである。

「うんうん、遅刻なんかしたらダメだものねえ。すぐお着替えしま
しょうねえ」

お母様は大仰に頷くと、私の傍らに腰を落とし
今、よつやつと縄が解かれ始めた。

「ふん、ふん、ふーん」

「ふんふん、ふふふん、ふふふーんふん」

「…………」

鼻歌などしながら、やけに手慣れた様子で解いていた母親を、私は色々と複雑な思いで眺めていた。

の人 お父様の顔を思い出して。

……気持ちが悪くなつて、急いで搔き消す。

なんて想像をしているんだ、私は。

「 つと、足取れたわよお

「…………え、あ、うん」

気が付くと、足の拘束が解かれていた。作業をし始めて、数分と経つていないのでなかろうか。果てしなくスピーディである。

「…………」

ともかくにも。

私はしばらく血流が滞つてている足を伸ばそつとして。

「 うあ！？」

思わず、悲鳴を上げる。

勢いよく循環し始めた血管が、痛みにも似た痺れを『えてきたのだ。

「 い、いにやついい！？」

たまらず赤い絨毯に横たわつてしまつ。頬に柔らかい感触が当たつた。

……私は基本的に、恐ろしいほど痛みに対する堪え性が無いのである。

「 あらあらあ。大丈夫、フェオちゃん？」

いきなり倒れこんだ私を、抱え起こしにかかるお母様。

「 だ 大丈夫です。ちょ、ちょっと待つてください、すぐ起きますから」

応えて、完全に曲がり切つたままの足をゆっくりと伸ばしていく。じわじわとした痛みと熱っぽい感覚。私はたまらずびくん、と体

を跳ねさせた。

「どたつ！」とお母様の手から落つこむて、再度レッドカーペットに激突する。

そのまま転げまわった。

「いたたたたたつ！」

私は未だ上半身を縛られたまま、ぐるぐると絨毯の上に身体を転がしつつ、情けないことに涙目になっていた。

痛い。無理。我慢できない。

「うううううう」と絨毯の上を転がって痛みを紛らわす。

……5年間の引きこもり生活で、忍耐といつ概念を身体が完全に捨て去つていいようだつた。

引きこもり負け犬▽S痺れ。

完敗である。

「あらあらあ、フニオちゃん、痺れぐらいで大げさねえ」「うううううう……」

のつぺりとした声に返す言葉もない。

呻いた私の額には脂汗が滲んでいた。

「…………いえ、ちょっと絨毯が柔らかそuddたんで、痺れついでに転がつてみただけです」

何に対する言い訳なのか、気が付けばよく分からなうこと口走つていたりする。

「と、とにかく、立てそつにないので、このまま縄外してくれませんか？」

「あらあ、そつ？　解きにくいけど、仕方ないわねえ」

言つと、お母様は部屋の隅に転げていた私に近寄り、上半身の縄を素早い手業で解いていく

「お母様？　……どうしたんです？」

はずだつたのだが、へそ辺りの結び目（そこから解けるらし）に手を添えたまま、お母様は静止していた。

かと思えば、突然動きだし、私の顔の覗き込むよう身を乗

り出してきた。

「フヨオちゃん」

妙に生真面目な顔で言つ。

「は、はい」

反射でこちらも素直に返事してしまつ。

ずいつ とまた身を乗り出してくるお母様。

「わたしねえ、夢があるの」

表情そのままに、どこか遠い所を見据えていた。

「……夢、ですか？」

なんだか なんだか、嫌な予感がする。

「うんうん。昔からの夢なんだけねえ」

たらりと。

背中に汗がつたる。

ところで、攻撃色といふ言葉を「存じだらつか。

ようするに威嚇のことなのだが

猫であれば、尻尾をぴん、と立てて毛を逆立てたりする、アレである。

これを人間に置き換えてみよう。

一つは単純に怒り顔。簡単である。他には暴力を連想させる、ものや行動。睨み付けたり、怒鳴ったり、殴る素振りなどがこれに当たる。

そして、番外として。

……笑顔。

笑みである。

「うふ、うふふふふ

笑つていた。

嗤つていた。

手に、汗が滲む。

……危険。

もはや米粒ほどにまで縮小していた、野生的本能が危険を訴えていた。

なぜか手がわきわきと開いたり閉じたりしている。いつもの仮面顔の瞳の奥に、明確な意図が透けていた。

「 お、お母様……」

何か

何か、手はあるか。

状況を確認。

状態を視認。

手は縛られて動けない。

足は痺れて動けない。

窓は高くて登れない。扉は閉まって開けない。そういえばなぜか音が不自然に聞こえない。

ない、ない、ない

……逃げられ、ない。

「 あは、あはははは

乾いた笑い声。

絶望の足音。

鼻の先に満面の笑み。

楽しそうに

本当に楽しそうに、お母様は夢を語った。くねくねしながら。「成長した可愛い娘を、嫌々剥いたり縛つたり、着せ替えする事なんだけどお」

随分と限定的で刹那的な夢を語りながら、その魔の手が伸ばされて

「 いやああああああ！？」

絶叫は、誰にも届かなかつた。

「 ま、まあ、その。な？ なんというか……犬に噛まれたと思つて、気を取り直して……」

ところ変わつて、馬車の中。

がたんっ と右でも乗り上げたのか、一際大きく揺れた。
木製の馬車。黒い革製の日光除け簡易天井。車輪は4輪。外から見ると、血のように真っ赤に染められた車体に、金の飾りをこしらえて、真っ黒なスポークをくるくると回転させているという、如何にも目立ちたがり屋なデザインをしている。

外装同様、無駄に金がかかつてそうな黒いソファに腰かけている私、その対面に座つている燃えるような赤髪短髪の男が下手糞な慰め方をしていた。

「 ほら、今から入学式つて、新しい門出が待つてるんだから、そんなふて腐れると 」

「 別にふて腐れてなんかない 」

遮るように私は無感情で言い放つ。

赤髪の幸薄そうな顔が困惑にひきつった。

「 い、いや、だから機嫌直せつて、な？ 」

「 別に機嫌悪くなんかない 」

「 ほら、笑顔笑顔ー。顔がなんか、死んでるぞ？ 」

「 生まれつきだから 」

「 」

馬車に乗つてから、ようやく黙り込んでくれた赤髪。

別に、ふて腐れているわけではないが、今は誰とも話したくない気分なのだ。

あの後

私は一次性徵を終えてから、母親に強制的に下着から制服までの着衣を着せられるという辱め それだけではないが を受けて、馬車へ放り込まれたのだった。

その馬車にあらかじめ乗車していたのが、この赤髪短髪に、不幸さ漂う顔付きのイヴァ・イルである。

私の幼馴染とも言える人物で、天涯孤獨のところをシュラップネル家に引き取られ、実家の方に住んでいるのだ。

……母親同様5年ぶりの再会。昔からなにかと気配り症で、それはどうやら相変わらずらしい。

私と同じくしてコンスタンティア魔道学院に入るらしく、それならとお母様と一緒に迎えに来たそうだ。わざわざ遠方まで「苦労なことである。

そして

もう一名、お知り合い。

「……お嬢様も、そんな顔する事あるんですね。初めて知りました」イヴァの隣で腕組みなどをしている人物。

黒髪。ポニー・テイル。 メイド服。

ロゼ。ロゼット・アフティ。 凄絶怪力鉄メイド、その人だった。

「どんな顔よ」

視線を投げかけ、先刻と同じように出来る限り感情が出ないよう に、聞き返す。

「そうですね。可愛らしくほっぺたなんか膨らまして、いつものひ ねくれつぶりを具現化してるかの様な面とは大違いです」

きつぱりさつぱり、ロゼは皮肉を隠すことなく言い切った。

「……ロゼ、実は私のこと嫌いでしょ」

「嫌われてないとでも思つて頂いていたのなら、普段のお嬢様の言 動と行動と思いつきによつて私が被つた事例を、今ここで再現して みましようか?」

嫌われていた。

完膚なきまでに、嫌われていた。
まあそれもそのはず

このたび、彼女も魔道学院に入ることになってしまったからである。曰く、「お嬢様のお守を奥様に頼まれた」だそうだ。……私は全く知らなかつたのだが。

こうなつたのもロゼが元々、有名な魔道士家系の出身で、その中でも天才、などと言われちゃつてたりしたことがあり、尚且つ年も一番近かつたからである。

だが当の本人は、それが嫌で当時の学校を中退、家出して（すんごい根性である）、憧れだつたというメイドさんとして生活していたのだ。

ここにきて、魔道学院にトンボ帰りである。
本人の弁を借りるなら、「メイド人生、ばっきばきの全身全靈粉微塵」である。ご愁傷様。

「はあ……」とロゼはため息をついて、流れゆく景色を眺めながら、「……私、メイドとしてシュラップネル家に仕えたはずなんですけど……いつ、お嬢様専属守護隊長になつたんでしょうか……」
と、どこかが哀愁を漂わせながら、ぽつりと呟いた。

ここに、コンスタンティア魔道学院について話しておこう。

世界最高峰と名高い魔道士育成機関。

基本的に全寮制。完全実力主義。

世界最高峰難易度の入学試験。卒業者には数々の伝説の魔道士。

その実態は、金さえあれば裏入学できる金持ち達の独壇場。評議会と呼ばれる政治機関の構成員、その『子息さん達による未来社会の縮図』。

……どこの世界も、突き詰めればこんなものである。

そんな、策略謀略飛び交う学校といつも閉鎖空間に

「 到着、ですね」

「 フェオ……大丈夫か？」

「 ここまで来たら、もう腹ぐくるしかないでしょ……」

長い、長い道のりを経て。

血塗られた、赤い箱舟から足を下ろす。

……ゆっくりと。

転ばないよう。こつん。

道に敷き詰められた大理石の一につに、茶色の革靴、その片方の底が今、足跡をつけた。

まもなく両足がその上に乗っかる。

「 まあ、もう仕様がないから 」

下から。

黒いルーズソックス。

グレーっぽい色に控えめな赤っぽいラインの入った膝上ミニスカート。

白いブラウスの上に、ミルク色のセーター。

紺色のブレザー。右腕上腕に、『祈りを捧げる魔女の横顔』のエンブレム。

襟に真っ赤な大き目のリボン。

はるか古代、存在した国、伝統の民族服、その「ペー。
らしい。

……あほらしくて、突つ込む気も起きない。

そして それを着こなす人物。

肩まで、母親譲りの緩いウェーブがかつた、淡い色合いの金髪。

透明な翠色の瞳。

過去一度も、日焼けをしたことがない白い肌。

柔らかな、それでいて凜々しい、寸分の隙もない顔立ち。

絵に描き表せない超絶美少女。

内面とは真逆。

二律背反。

欠陥と、完全。

「……精々、恥を晒してやるよ」

一匹の、魔法不能者まけいぬが、放たれようとしていた。

(3) 大注目負け犬の乱闘騒ぎ

「……ふーん」

馬車を降りて少々道なりに歩いた所。
見上げて。

眺める。

私の背の一倍ほどもある壁はこの先もずっと続いていた。威圧感たっぷりの両開きの巨大な門は、すでに開かれている。さながら城壁を思わせる　いや、用途はそれと同じ意味を持っているのだろう。門の横、長大な壁にごくごく小さな紹介文。「コンスタンティア魔道学院」の黒地に金色の文字は、昼夜がりの斜光を浴びて、なんとかきりぎりの存在感を放っていた。
ここが今日からうことになる、いく度目かの化け物屋敷。
魔法の巣窟。

「ほえー……」

……と若干実は緊張気味な私の横、間抜けな声がした方を見やる。
「なんであんたも驚いてるの」

言われてイヴアは頬をポリポリと搔いた。

私と同じような制服を着こんでいる。もちろんスカートではなく、同じような色合いのスラックスだ。

「いや、実は俺も見たのは初めてなんだよ。あんまりこっち来ること無かつたし」

「徒歩20分ぐらいの距離でしょうが。あと一応言つとくけど、これでも私は初めてじゃないからね。小さい頃何度か連れてかれたんだから」

嫌々、無理やり、だが。

言葉の裏の意味が読み取ったのか、彼は苦笑した。

「まあお前ほどじやないけど、こうこうこうこうこうは嫌いだからな」「皮肉げに言つ。

どうやら彼も、彼自身が決して望んでここに来たわけでは無いらしい。

大方、ロゼと似たような理由なのだろう。昔から拾つてもらつた恩 後ろめたさがあるためか、イヴアはお父様達の言いなりになることが多い。

お互い、ままならないものである。

「 それにも、すういですね
後ろから口ゼガぼそつ、と咳いた。

「 そう、ね」

振り向かず同意する。

そう、すごいのだ。

私達の注目度が。

ぼけー、と田舎者の様に、門の手前ど真ん前（かなり邪魔である）にただ突っ立つている私達だが、なにもここにいるのは私達だけではない。

なにしろ、入学式である。

だてに世界最高峰を謳つてているわけではない学校、その入学式である。

在校生はもちろん、新入生、その親達、政治関係者の方々、OB

そんなところか。

様々な人達が、門の内側に吸い込まれて行く。

その通り道を完全に両脇に追いやつてているのは、他でもない私達3人である。

立ち止まる者、見る素振りを見せない者、蟹歩きで通り過ぎていく者。

いずれも困るよつて、または避けるよつて、出来上がつたのは不自然な無人空間。

……大注目だつた。

「私がかわいいからかな」

「……相変わらず自分の容姿にだけは自信たっぷりですね。その調子で内面もより一層美しくして頂きたいものです」

ちょっとした冗談に嫌味たっぷりに突っ込んでくるロゼ。極端に焦ると地が出るが、基本的にいつもこんな感じのキャラなのだ。

凄絶怪力鉄メイド。一般的な主従の関係とは程遠い。

ちなみに彼女は私と同じような制服を 着ていない。何故かメイド服のま。

わざわざ描描してあげてもどうせ聞く耳を持つはずがないので、完全にスルーしているのだった。

ところで何故こんな目立つてしまつたのかといつと、それはあの目立ちたがり屋な馬車に問題があつたのである。

只でさえ目立つデザイン シュラップネル家はあいつたド派手な赤色を好む だつたが、それだけでは無く。

気付いたのは馬車を降りて、御者をしていた屋敷のメイドを見送つた後。走り去る馬車の背。描かれていた、何の変哲もない一本の剣。

……家のシンボルマークだつた。

全く、これっぽちも自慢ではないが、シュラップネル家は超ド級に有名だつたりする。

長い間引きこもつていたので、有名人精神旺盛の親が、自分の娘をひたすら万人に晒したがる事を完全に忘れていたのだ。

というかその被害にあつているのは、もっぱら妹のベリルだつたので、まさか私もやられるとは思いもしなかつたのである。

「俺は完全にとばっちりだな……」

何やら被害者面で、恨み言のようなことを言つイ、ヴァ。

私だつて、目立ちたくて目立つたわけではないといつのこと。

目立つことは、そのまま死に繋がる。

少々、大きさかもしれないが、学校という閉鎖空間はそういう所である。引用、これまでの人生データ。

異質を排除。

特異を消去。

人間に擬態できなければ、負け犬二度目の人生、バッドエンド。魔法学院に魔法不能者が行つて、擬態できるか否か

脳内ショミレーションして、泣きそうになった。

「……いいじゃ沒有別に。むしろこの注目度を有効活用して、めぼしい子片つ端から告白したら、シユラプナル知名度パワーで一人ぐらい付き合えるかもしれないじゃない。勝手に幸せにでもなつてないよ、別に怒らないから」

「……何で怒つてるんだよ」

「別に」

私はそつけなく言い放ち、いつまでも校門を通りにくくしても仕方ないので足を進めた。突然の無人空間区域の移動に人波がざわざわと揺らぐ。

実はこのままでは足がつりそうだったのは、内緒である。引きこもりはつくづく体に悪い。

「イヴア様。お嬢様が『別に』を連呼した時は、いじけて弱っているサインなので、畳み掛けるなら今がチャンスです」

「え？ あ、ああ」

……歩き出した私の後ろで、口ゼガ何やらいることを吹き込んでいた。

城壁の中も同様に威圧感たっぷりな建築物があらゆる所に鎮座していた。

私の屋敷のように、ただお金がかつてそういうだけではなく

言つなれば機能性を求めたかのようだ。

無駄な飾りや突起を取つ払つたと言つべきか、主に煉瓦作りのようだ。詳しいことは私には分からない。角張つた輪郭は要塞を思わせる。おそらくまた魔力でも込められており『外からダイナマイトで爆破しても、傷一つつかない素敵要塞』というオチであろう。魔道士という人種が好きそうなフレーズである。

その素敵要塞達 校舎達のちょうど中心部。辿り着いたのは、巨大なドーム型の建物だった。

「……これ、覚えてる……」

それはおぼろげな記憶の中で、強く印象に残つている建物だった。先程の校舎とは打つて変わつておしゃれ建築物。円形の外縁に、柱が規則正しく並べられている。その柱で支えるようにして、上からドーム状の屋根を被せていた。

そのドームはただただらかなアーチを描いておらず、直線だけ造られているような段々を作つており、上昇するにつれてそれは徐々に細くなつていいく。

そのてつぺん、一番細い所に立つてゐる一体の女の像。

まるで天に祈願するかのように、両手を掲げて空を仰ぐ長髪の女。学院のエンブレムにも描かれている、魔女コンスタンティアの像である。

「はあ……」

一層深まつていく『魔法』と『学校』という名の雰囲氣に、私は憂鬱さを吐き出すようにため息をついたのだった。

「ところで、代表の言葉はしつかり考えてるのか?」

「…………ふえ？」

「ドームに入つてすぐ。目立たないことを負け犬らしく諦めた頃のこと。

イヴアのその言葉は私にとつての余命宣告にも等しく、これから学校生活、入学式を終えてから一週間生き延びることが出来るのか、実は屋敷を追い出されてどつかの魔物にぱぱくりとやられる方を選択した方が、まだ長生きできたかもと思わせるには十分すぎた。「新入生代表の言葉。ほら、初等の入学式の時もやつただろ？ まあ、あの時とは規模が桁二つ違うけど」

こちらの氣も知らず平然として軽い口調のイヴア。

私はと言えば、その場で足を止めて固まつていた。

…………聞いてない。

そんなこと、聞いてない。

なんで？ 騞された？ 誰に？

「ん？」とイヴアも足を止める。ロゼは振り向かず人ごみに入り行く後ろ姿が見えた。

「どうしたんだ？ おーい。フニオ？」

怪訝そうにイヴアは私の顔を覗き込み、目の前で手を振つたりしていた。

私が立ち止まつたため、比較的広い通路が一気に狭くなり、後ろでは交通渋滞が発生していた。

だがそれでも私は全く動けず。

何か大きくてどろどろした異物を、胃の底から嘔吐しそうな錯覚。胃の底から飛び出すような感覚。

「おい、どうしたんだよ？ ほら通路が詰まつてるから

イヴアは私の背後を見やりながら、少し強い口調で諫めるように言つて

ふと気付いたように手をぽんつ、と叩いた。

「…………あのさ、もしかして、考えてないのか？」

「

後方から、いきなり混雜し始めて困惑したのか『何だ何だ』と騒いでいる声が聞こえる。

前方では、引き返して何事か確かめようとする野次馬が表れていった。

「こりどようやく、私に限界が訪れる。

「あ

「……おい、やつぱり考えてなかつたのか。ビーすんだ、後20分と無い」

「あんの陰湿肉欲工口魔人があああつ！」

叫んだ。

力の限り、叫んだ。

叫び終わつて

沈黙。

田の前にいる赤髪も、後ろの騒ぎ立てていた魔道士達も、前で聞き耳を立てていた野次馬達も。

沈黙。

皆が皆、黙りこくつて辺りは静寂に包まれていて

その静寂を破つたのは、やはり息を切らしていた、私だつた。

「帰るつ！」

勢いよく踵を返す。後ろの混雜地帯が道を開けようとして

開けられずに、一部ドミノ倒しになつていた。

だがそんなことお構いなしに 気付かずに、私は大股で往路を引き返そうとして。

「ちょ、ちょっと、フェオ！？ おい！」

がしつ と後ろから手を掴んだのはイヴァだつた。

「帰るつて、ここまで来て帰るのはさすがにないだろ！ 腹くくつたつてさつき言つてただろうが！」

私は掴まれた腕を振り解こうとぶんぶん振り回すが、さすがに男の力に女の力（プラス引きこもり補正）、まるで外れない。私はも

う、やけになつていた。

「いやつ！ 帰る！ 絶対帰る！ あのセクハラ母親仮面の鉄面皮に一発蹴りかましてから、一日でも長生きして死んでやるうつ！」

「待て！ 落ち着け！ 早まるなあ！」

夫婦漫才よろしく、私達は叫びながら腕を引っ張り合つていた。

周囲は、どの顔も呆気にとられたかのような表情をしている。名家、シュラップネル家。大衆の面前で駄々をこねまくつていた。

と。

「こちらです」

突如、野次馬サイドが真つ二つに割れた。

そして現れる人影。

「……ん？」

「なによ」

思わずイヴアとの取つ組み合いを中断して、その人影に目線を送つた。

その人影は、1・2 計4名。先頭がそれを導くかのように、数歩先を歩いていて。

「…………口ゼ、何してんの？」

「いえ、どうせひねくれ我が儘お嬢様の事ですから、こんなことになるだろうと^{あらがじ}予め先手を打つておきました」

淡々と先頭を歩いていたメイドが応答する。

その後ろから彼女を追い越して、こちらにさらに歩み寄る人影の一つ

端的に初対面イメージを語るなら、前時代映像的白黒世界の住人かと思えた事を挙げるだろう。

色の無い肌に、すらりとした細身。光沢のある銀髪を腰まで伸ばしている。格段珍しくない黒い目が、組み合わせも相まって逆に印象を強めている。

私と同じように学院指定の制服を着ているが、左腕の上腕、学校のエンブレムと対称に何かのマークが縫われていた。

「いらっしゃり、ホワイトヘッド家の」令嬢。アナ斯塔シア・ホワイトヘッド様です」

紹介されて、その女は小さく会釈した。顔には何やら怒気に近い不満が張り付いていて。

「新入生代表の言葉、代理としてやつて欲しい、とそここの従者から聞いたんだけど」

と、ロゼを顎でしゃくる。

「……ホワイトヘッド？」

せつげなく居住まいを直していた私は、誰ともなく呟く。直訳すると白頭でいいのだろうか。何とも面白みのある家名である。命名者とは気が合ひそうだ。

だがしかし、人を顎でしゃくるような人間とは永生的に周波数が合わないと思い、私は白頭ではなく、ロゼの方に事情を聞くことにした。

「ロゼ、どうこいつこと？　この人誰？　代理なんかできるの？　ホワイトヘッドって白頭って直訳していいの？」

「…………お嬢様。あなたはもう少し、場の空氣と発言の是非を的確に判断するように心掛けた方が色々身の為になると思うのですが」

私の問いに、珍しく冷や汗など垂らしながら焦りを滲ませるロゼ。メイドのクビ関係以外で慌てた素振りを見せるなど、初めてで新鮮な気がした。

とにかく、ありがたい忠告通り場の空氣とやらを読もつと、白頭の方を見やつて

「…………、…………、…………、…………」

背中にオーラなどが見えそうなほど、真つ赤に、明らかに憤怒の表情を浮かべた女が、握り拳を作りながら直立していた。

「え、えーっと……」

やはり私のせい、なのだろうか。

……白頭、いい名だと思うんだけど。

(バカっ、なんでわざわざ挑発するんだよ！)

耳元で小声の怒鳴りを上げるイヴア。彼も何やら焦つていうようだった。

周囲のギャラリーも、彼と似たような顔をしている。いや、より一層恐怖が入り混じっているようにも見えた。中には好奇心を浮かべている者もいるが、それはごくごく少数である。

……どうやら状況を把握してないのは私だけらしい。

なんだか、途端に不安になつたので、横のイヴアに尋ねてみるとにした。

(あのー何がどうなつてゐるの？ なんであの女が怒つて、みんな怖がつてゐるの？)

(…………お前、もしかして知らなかつたのか？ シュラプネル家のくせして、知らなかつたのか！？)

「いにやつー？ ちょ、ちょっと！ 苦しいー 苦しいつてばー！」

すごい形相でイヴアが私の首を絞め始めた、その時である。ぱんっ！ という、何か衝撃音のような、破裂音のようなとにかく、けたたましい音が廊下に走つた。

それが一体何の音か、確認する前に。

「あなた シュラプネル家のの人間が、わたしに喧嘩を売るとはい一度胸してゐるわね……」

細々と、だが根深く響く声で、女が言つた。

その女の立つてゐる、その床
床が、不自然にへこんでいた。

…………魔法。

「 つー

魔法。

異質の力。異能の力。

違う。

異質なのは、異能なのは。

魔法不能者。

……圧倒的、弱者。

そして、女の手の平が、私に向けられていて

「やめろ」

すぐ遮られた。

眼前に、腕。

「…………？」

「イヴァの腕が、女の手と私の間を、遮っていた。
「こんなところで、こんなことで、魔法を使う気か。正気の沙汰じ
やない。ホワイトヘッドの名が聞いて呆れるな」

「な なんですか！？」

激昂する女。

その様子を、彼は冷静に見据えていた。

鋭い目つきが、女を射止めていた。

……まるで別人。先程まで私と馬鹿をやっていたのとは、まるで
別物。

イヴァ・イル。

シユラップネル家に拾われるほどの、才能ある魔道士の卵。
知っていたはずの人が、いきなり遠くに行ってしまったかのよう
な。

身近だった人が、別人に変わってしまったかのような気がした。
ざわつ。

ようやく事態が呑み込めたのか、付近の観客が一斉にざわめき出
す。

「 つく！」

女の判断は早かった。

衆目から逃げるよう^{まいそう}に、女とその連れ達は颶爽と元来た道を引き

返していく。

その後ろ姿に取り残されるよひていて。

……ぺたん。

腰が、抜けた。

「 お嬢様！？」

女の子座りで冷たい廊下に沈んだ私に、慌ただしくロゼが駆け寄つてくる。

「お嬢様！？ 大丈夫ですか！？ 「ごめんなさい、私、わたし、こんなことになるなんて思わなくて 」

焦りすぎて地が出ていた。

いつもこうだつたら可愛いメイドさんなのに、などと私はのんきなことを考えて。

……人々の喧騒は、しばらく止みそうになかった。

その後、学院の教師らしきものが現れ、必死に騒ぎを収めていた。

あのホワイトヘッド家とやらせ、ジリやらシユラップネル家と浅からぬ因縁らしかったそうな。詳しいことは知らない。

ともかく色々と事情を聽かれ、入学式の後に呼び出しどの一件。

その間、私はなんだかぼんやりしていて、半ば無意識に入学式の会場へと向かっていた。

(4) 悟り開いた負け犬の入院式（前書き）

2/11 18時に前回の改訂をいたしました。
アナスタシアの口調、仕草の変更、特に最後の場面のフュオの内
面描写（地の分）等の改訂が著しいです。
誠に、申し訳ありません。

(4) 悟り開いた負け犬の入院式

魔法。

この世界において人間の生活の根幹をなしている技術。魔力。

それは魔法を生み出す概念。

それは魂とも生命とも呼ばれ、あらゆる全ての物体に存在しているという。

人間は自らの魂を以て、外部の生命に作用し、魔法を生み出すという。

ここで、規格外の話をしよう。

もし、魂とやらをもたない生命体がいたとして、その生命体はその世界で一体どういう不都合を受けるのか。

人が当たり前に火を起こせる中、せつせと枯れ木を集めて原始的な火起こし。燃料などその世界ではありえない概念。『大昔の昔、そういう時代がありました』と、初等学校の教師が歴史として語っている程度。

人が当たり前にちぎれた腕を繋げる中、ただ悲鳴を上げながら出血死を待つばかり。医療などその世界ではありえない概念。他人が治そうにも、その生命体には操作するべき魂がない。

……なにより、その生命体はこの世界に生まれ落ちておきながら。無駄に前世のことを引きずつて、魔力と魂が別物だということを深く僻見し、その世界のあらゆる理と自分が別物だということを強く自認し、生まれ変わりなど有り得る筈のない馬鹿げたことだと酷く嘲笑し。

人間は、少しでも数の暴力から外れた者を排除すると強く信仰していた。

「うふふふふ……」

とんだ負け犬。

とんだ敗北主義者。

だが、今更考へを変えるにはもつ遅すぎた。

ふえ、フェオ？ ど、どうしたんだ、いきなり真顔で笑い出

してすこく怖いんだが……」

「イヴァ様。それは耐え難い現実から身を守る為のお嬢様式防御法の一つです。外部からの接続を断ち切つておりますので、今の内に胸でも尻でも好きなだけ弄つて下さいませ」

そんなひとみたいで、そ、いや、いいや

ほら、このように大分物足りない気毛しますが、

弾力性は中々と極上品

「アーニー、おまえがアーニーだらう？」アーニーは、アーニーのことをアーニーと呼んでいた。

セーターの中に突っ込んで、私の胸を揉んでいた手を掴むと、「

「あら」と口ぜは少し驚いたふりをしていた

「おかえりなさいませお嬢様」
そんな顔を真っ赤にして、
僕持ちよ

「……あなたへの怒りで、いつなつてゐるよ。」

睨みつけても平然とした顔で、私の服から手を引き戻す口ぜ。

イドに戻っていた。

入学式場。ドーム型の建物の中心部に位置する、外見そのままでのドーム状のホール。

中心の舞台を囲むように椅子が並べられていて、舞台に一番近い所から、新入生、在校生、親。番外として教師、来賓という名のゲストが、新入生のさらに内側に入っている。

同じ枠の中では、どこにでも座つていいくことになつていたらしいのだが。

事情聴取の後、私達が少し遅れ気味に入場したところ（まだ始まつてはいないが）、なんと特別席が用意されていた。

一番先頭、横並び三席 なぜか周囲と離れている。その舞台挟んだ向こう側、アナスタシア・ホワイトヘッド並びにご家族ご親族の方々の縦列。後ろ側の保護者席、当然来てたらしいお父様とその親戚の方々。

……本当に因縁浅からぬ仲だつたらしい。それに完全なる公認。「ロゼ。あんた何考えてあの女連れてきたのよ……」

呆れるしかない。

右隣に座つているロゼに、心底呆れているのが伝わるよつに私は愚痴つた。

「……すみません。その件に関しては、完全に私のミスでした」とすると殊勝にも彼女は謝罪の弁を述べた。

「天敵だからこそ、お嬢様のひねくれ口先八丁で代表を交代できるかと思つていたのですが、引き籠もりの世間知らずぶりを少々舐めていました」

「……天敵だからこそつて、どういう意味よ」

引きこもり以下はスルーで進行させていただく。

ひねくれ口

先八丁もか。

ロゼは短くため息をつき、説明を続けた。

「 あれは代々、入学するその時々の最も強い権力者の子息が行う、一種の伝統のようなものです。つまり今年は、我らがお嬢様の番だつたという事ですが」

……そこまですごかつたのか、家は。^{うち}

なるほど、確かに言われてみると、ただ私のためだけの温室にメイドさんが計10名いたり、幼い頃、さんざん初等学校で負け犬つぶりを晒していたことが、その学校内だけの噂で収まっていたのも、それが関係してたりするのかもしれない。

「」の魔法社会、権力といつものままでいたり絶大のようである。

ロゼの説明は続く。

「そして唯一、他でお嬢様と肩を並べることができるホワイトヘッド家の「」令嬢なら、しらばっくれて代理を頼めるかと思っていたのですが、どうやら挑発だと取られてしまつたようですね」

「ふーん……」

挑発。

『白頭』と言つた事が原因ではなく、代理を頼んだこと自体が生徒代表の言葉など、どうでもいいと語つてている私の態度が。……そんなことで、死にそうになつた。

「それにしても、意外でした」

ふと、ロゼは付け加えるように言つた。

「屋敷ではいつも傍若無人なお嬢様が、あんなにも怖がつていふところ。私、初めて見ました」

意外なことを言つ、ロゼの表情はどこか重かつた。

先程の自失していた私の面でも思い返したのだろうか。どうせ滑稽な馬鹿面をしていたことだろう。あまり思い出さないで欲しいものである。

私は自嘲ぎみに苦笑した。

「なんのために、あの屋敷おんじつに5年間も引きこもつしてたと思うてんのよ」

いつだつて。

どこでも。

なんでも。

「魔法が、死ぬほど怖いからに決まつてゐるじゃないの」

これまでの要約。

お母様に嫌々この学院に来させられた私は腹をくくつて、出来る

だけ目立たないよつにして細々と恥を晒そとと田論んでいたところ、一番の権力者であるシュラップネル家の娘だと言つことで衆目の大玉を食らい、そのせいで世界最高峰を自称するコンスタンティア学院の生徒と親達と関係者の前で演説させられる羽目になり、それを代わつて貰おうとしたところにやら危うく魔法で殺されそうになり、しかも結局代表は代わつて貰えず。今、ここで、入学式が始まろうとしていた

代わり映えしない、式典だつた。

どれだけ人間が居ようとも、どれだけ金持ちが居ようとも、結局やることなすこと根本的には何にも変わらない。

開式の言葉。学院長の挨拶。来賓様のご紹介。在校生代表の挨拶。次。

『次は新入生代表の式辞です。代表者の方、お願いいたします』マイクも拡声器も無く響き渡る声が、私を呼んだ。名前を呼ばない辺り、ちょっとしたサプライズ演出のつもりだらうか。

ならば。

超ド級、目立ちたがり屋シュラップネル家一族の一員としては、こんなさり気なく味氣ないものより、もつと派手なサプライズを好まざるを得ない。

つまり。

『 代表者の方? 舞台の方へお願いいたします』

司会が私の方に戸惑いの視線を投げかける。それ以外の方々も私の方を窺つていた。

未だ、一向に動く気配のない私の方に。

「フヨオ……」

なぜか、いつもこじつ時に諫めるはずのイヴアが気まずそうにしていた。口ゼは沈黙を守っている。

サプライズ、演出。

つまり。

サボタージュ。

責任放棄。

無断欠席。

ざわざわと 特に、私の後ろから聞こえた。お父様とは、今日も引き続き口を聞いていない。目も合わせていない。あの人が、一体何を考えて私をここに連れてきたのか分からぬ。

「お嬢様、よろしいのですか？」

黙っていた口ゼが、私に静かに尋ねる。

「……ええ」

私は短く答えた。

手遅れ。末期。獣医も黙つて首を振る。

もう目立たないことが不可能ならば、精々、恥を晒してやる。この殻潰しを、駆り立てたことを精々、後悔をせてやる。

負け犬、遅すぎた反抗期。

騒ぎは、大きくなつていき。

突然、止んだ。

向こう岸に、一つのシルエット。それがゆっくりと影を大きくしていく。それから、台上に伸びた。

それが喋る。

『 お呼びにかかりました、新入生代表、アナスタシア・ホワイトヘッドです』

銀髪に、張り付いた不敵な笑み。その視線は、絡み付くように私を捉えていた。

白い陶器の間から出る黒い蛇が、私に纏わりつく。

『この場で、このよつてに挨拶が出来ることを、とても誇りに思いました』

歯の浮くよつた言葉の羅列。銀髪を揺らしながら、仰々しく女は言つた。

その言葉は、誰に対していつたのだろうか。

そんなことは考えるのも煩わしい。

そして、その演目の最後。拍手も待たずに、彼女は一点に指を差した。

『フェオドール・シュラプネル』

呼んだ名は私の名前。一つ目の私の名前。今、一度目の終焉を迎えるつある私の名前。

壇上の女は、指さした腕をそのまま、左腕の上腕を私に見せつけるように持ち上げ、宣言した。

『あなたの様に誇りを持たない人間には、この学院は相応しくない』

入学式で、退学勧告。

共に、恐らく入学式で初めてであろう、サプライズを終えて、アナスタシアは身を翻して段を降りた。 拍手をする勇気のある者は誰もいない。

.....左腕上腕のマーク。小さくてよく見えなかつたが、先程のことで覚えてはいる。

青い、澄んだ大空のような色の盾形の切り取り。その中を泳ぐように2対の白竜。

ホワイトヘッド家の紋章。

瞬く間に勃発しようとしている、一大財閥の戦争。

辛くも、その最前線先発者に選ばれた私は、とりあえず一週間生き延びることを、目標にした。

(5) 謎が深まる負け犬の明日（前書き）

やつといわ、一日が終わりました。
約2、5万字。ようやく学園がスタートするようになります。
サブタイトルを数話、若干変更いたしました。

(5) 謎が深まる負け犬の明日

さて、約束通りの説教タイム。

お呼び出し。

フュオドール・シュラップネル。

アナスタシア・ホワイトヘッド。

先の首謀者、両名は学院長室にて面を突き合わせていた。

素敵要塞の一つ、その一階の一室。特筆して挙げられる点は、何も無いということが挙げられるだろう。

……何も無い。からっきし。小さい窓から入る、おやつ時過ぎの日当たりと、角張った大き目の木製の机が中央にぽつりと置かれているだけ。

白すぎる壁が、床が、より一層空虚さを醸し出していて、まるで取調室のような、いや実際に今から取り調べを受けるのだが。

「」に来るまでの廊下や、そこから見られた事務室らしき、教室らしきその他の内装が、殊の外華やかな装飾がしてあつたのも、この部屋の尋常の無さをこれでもか、これでもか、と主張していった。

会場を後にして、オカマ風貌の教師に誘拐され『もうちつとしたら学院長来るから、それまでここで待つてねい』と、この牢獄に閉じ込められた私達は、先程の喧嘩（？）の続きをする気にもならず、囚人さながらの気分で机の前に直立し、ひたすら黙り込んでいた。

「……」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……」

かれこれ、20分ぐらい恐らく経っていると思つ。多分。

時間間隔すら惑わされていた。

何も無いという恐怖。人間は何も無い部屋に閉じ込めておくと発狂する、と何かが言つていたことを思い出していた頃。

「やあ、『じめん』『めん』。少し遅れてしまつたかな？」

やけに軽い声で後方のドアから入つてきたのは黒髪の優男風。先程の式典でも、何やら言つていたような気がする、学院長だった。

何となく、私はほつとしていた。

「ちょっと色々とトラブルがあつてね。まあ、君達なら予想もついてると思うけども」

彼は言いながら部屋を進み、私達二人と机を挟んだ所に移動した。ちなみに椅子は無い。椅子と机、セットで然るべき用具のかたつぽをわざわざ取り除く必要性は分からぬ。

と。

「……先程は申し訳ありませんでした」

抜け駆けする白髪。横目で睨みつけてみるが、そうしたところ何の意味もないことも分かつていた。

説教タイム。

実のところ、呼ばれた理由は当初とはすり替わつていた。

コンスタンティア魔道学院。世界最高峰を自称する生意気な学校。その実態は、金持ち共の醜い権力争いの場。その場で2大筆頭金持ち家の娘達のいざこざ。

特に狙つてやつたわけではなかつたのだが、というか思いつきでやつたのだが、物凄い飛び火が、あちこちにボヤを起こしてしまつたようである。

負け犬のやけくそ、被害甚大。

どうも、やりすぎてしまつて、

「すみませんでした」

かけらも思つてないことを、一応私も礼儀として言つておく。

学院長は 実際その被害を一番被つてしまつた第三者さんは、

朗らかに笑つた。

「いやいや、済んだことだからね。うん、もう済んだことだから、
気にしなくていいよ、二人とも」

……朗らかに怒っていた。

なんだかイヴアと同じ匂い 不幸を真つ先に被つて そうな雰囲
気である。

まあ、もう遺伝子レベルでそういう人はいるらしいので、猫に噛
まれたと思って、人生楽しく諦めた方が吉である。

私みたいに。

「まあそういうことだから、それについてはこれで終わり。それで、

フュオドール嬢」

「……はい？」

案外あつたり彼は話題を切り替えた。もつとぐちぐち言われるも
のだと思つていた私は、少しひっくりして頬狂な声で返事してしま
う。

ふと先生の顔を見やると、何やら先程とは打つて変わつて真剣な
顔をして。

……やたらと、真剣な眼差しで私を見つめてきていた。
じーっ、と集中しているかのように、整つた顔がこちらを見据え
ていた。

なんだか、居心地が悪くなるような視線。

むずむずする。

見透かすような、見通すような。ずっと私の胸の辺りを六が開く
ほど見つめていた。

……ん？

見透かすような。

魔法……？

「あ あの、そ、そういう反則技はいけないと 思います、男とし

て「……は？」

思わず胸を手で隠すしぐさをしながら、私の口をついて出た言葉に、先生は困惑で目を丸くしていた。

その顔が物語っていた。 無実。

「い、いえ、なんでもないです……」

……ちょっと過剰反応しそぎたらしい。元男の、あまりにも女子じみた胸の隠し方に、思わず顔が赤くなるのを自覚しながら、姿勢を戻した。

その横で、ふつ、と何やら嘲笑するかのような笑い声。

「見るほども無いくせに」

ぼそつ と、聞こえないとでも思っていたのか。

私は、叫びそうになる気持ちを何とか抑え、思いつく限りの怒り顔で、白髪を見殺そうと試みていると、「ふむ……やはりそうだね」と、何やら先生が呟いていて。

「 やはり、君はびりやり、特殊なようだね」と、言つた。

「…………ふえ？」

今度こそ、私は素つ頓狂な声を上げていた。横では白髪がきょとん、といった顔をしている。そして多分、私も似たような表情いや、もっと混迷顔していたに違いない。

「…………え、えと。なんて、言つたんです？」

慌てて聞き直す。

聞こえていなかつたわけではない。何を言われているのか、分からなかつたのではない。

ただ理解ができず、意味が分からなかつただけ。

この人は、私の胸のあたりの、一体なにを見ていたのだろうか。

見れるのだろうか。そんなこと、私は聞いたことも無い。

先生は、毅然^{きぜん}とした顔で再度言い直す。

「 君は、どうやら普通の人達とは違うみたいだね。異質といつべきが特異といつべきか。何とも表現し難いが、そうだね、君のお父さ

んが言つては

「

「ちよ、ちよっと待つてくださいー。」

遮る。

理解が追い付かなくなつて、遮つた。

どつこつことだ。

お父様が、言つには？

学院長に自分の娘が『魔法不能者』だとでも言つばかりしていたのだといふのか。

入学試験を金で弾き飛ばし、その上で、娘が魔法を使えないということを学校側に言つのか。

なにゆえ、それで今この場所に私は立つていいのだらうか。

といふか、そもそも魔法が使えないのに、すぐに退学とかさせられないのだらうか。

意味不明。

理解不能。

私のこれまでの様々な疑問の氷塊が、爆発していた。

「……まあ、君がお父さんを恨む気持ちも、分からなくもないが、別に悪気があつた訳じやないんだ。そこだけは理解した方が良い」そう言つて、学院長は机を離れ、私達の傍らを通り過ぎていつた。その後ろ姿は、話はこれで終わつたと言わんばかり。

こんな中途半端。こんな謎だけ深めて。

バタンっ と音がして、彼は部屋から姿を消した。

しばらくして。

「…………どつこつこと?」

残された第三者が私に尋ねる。

こつちが聞きたいわよ、私は吐き捨てて、走り去るよつて牢屋から逃げ出した。

「ちよ、ちよっと、待ちなさいー。」

バタンっ！

最後に思いつきつ、ドアを閉めてやつた。

何の気晴らしにもならなかつた。

コンスタンティア学院、新入生の初日のスケジュール。

入学式を終えた後は、学院の広大な敷地内の隅っこにある寮にて、またしても式をあげることになつていた。

入寮式。つまり、ただ部屋割りと使用上の諸注意などなど、ただそれだけのことなのだが。

そしてそれは私が到着した頃には終わつていて、私は自分で寮母さんらしき人に、部屋の場所と、簡単な寮の法律を聞いて（その間、皆部屋で荷物の整理をしていたのか幸いにも注目はされなかつた）、すぐさま新たな寝床へと足を伸ばした。

なんだか見慣れすぎた赤絨毯を進み、扉の前へご到着。部屋番号を確認して、あえて私が大つ嫌いなノック音を響かせてみた。すると、「はーい」と中から元気な声が聞こえてきて。

「……あれ？」

取りあえず中に入つてみることにした。

ノブを捻り、私が足を踏み入れた瞬間

「おおお！ ようやく」対面ですねフェオさま！ うわあ、近くで見ると可愛さ10倍！ わあ、すごい金髪サラサラ！ 肌超きれいー！ なんですか、もう、これ一体どういう仕組みしてるんですか！ あ、ちょっとほっぺたブにブにしますね？」

「……」

変な人がいた。

今日一日、5年ぶりに外へ出て、懐かしい人に会つて。

初対面で殺そうとしてきた誇り大好き白黒や、なんか怖気が

するようなオカマ風貌教師や、優男風の視姦学院長など、散々な人間達に会つて。

……その中で、さらに群を抜いて変な子だった。

小柄。ふわりと軽そうな栗色の髪、そのうなじ辺りを折り返すようになじ留め。人懐こそうなブラウンの瞳をぱちぱち瞬きしながら、小動物よろしく、私の周りをくるくる回りながら、ほつぺたをプにプにと突いていた。

「ぬわー、なんという弾力！ なんというもつちり感！ こんな細いのに、なんでこんな柔らかいんですか！ ぬう、もしかして、お尻とかもつと凄かつたりしますか？ あ、あの、出来ればでいいんですけど、それだつたらお胸の方も触らしてもらつてもいいですか？」

「それはやめて」

きつぱり拒否し、もう突かれながら何度も目かになる部屋番号の確認を終えて、あまり関わりたくないが、遂に聞いてみることにした。

「……あんた誰」

その突き放した聲音の問いに、なぜか顔をぱあつ、と輝かせて、その女の子はどうしてか敬礼ポーズで自己紹介を始めた。

「あたし、イルマ・カルディコットって言います！ 今日から一緒に住むことになる夫です！ 呼ぶときは『イルマちゃん』、もしくは『あなた？』と愛を込めて言つていただけるとより嬉しいです！」いつの間にか入籍していた。しかも私が妻役。元男としてなんかもうアイデンティティが壊滅状態だった。

頭が痛くなつてくる。

「……えと、ここになんか仮頂面した、黒髪ポニーのメイドさんとか来なかつた？」

なんとか我慢しながら、一応の相部屋候補のはずだつた人物が、ここに来ていなかを聞いてみた。

「メイドさん、ですか？ ああ、あの一緒にいた、フエオさま

には到底かないませんが、すつゞく綺麗な人ですね。の方なら、
多分違う部屋だと思うですよ？」

首を傾げながら、本人が聞いていたならば、恐らく無表情で怒り
狂うだらう返答をした。

私に負けているといつこと、綺麗な人と言われたことと、一重
の意味で。

まあ、凄絶怪力鉄メイドのことはさておき。

お金にものを言わせて入学しておきながら、護衛として私に付け
た口ぜを、わざわざ寮で外す必要性が計り知れない。

本当に、一体何を考えているんだろうか、あの人達。

……意外に何も考えてないような気がしてきた。ずっと今日一日、
色々深刻に考えてたけど、『ごめんねえ、フェオちゃん。なんとな
く、嫌がらせをしてみたかったのよお』とか、あの母親仮面ならあ
りえそうな話である。

「……ってか、間違いなくそれは少なからず思つてるよね」

「はい？ フェオさま、どーかしたんですか？ メイドさんに何か
あるんですか？」

「……ん。いや、なんでもない」

独り言を呟いていたらしい。

……とにかく、なんだか今日はものすごく疲れたので、馬車から
の荷物の整理とか、夕食とか、もうその他の諸々、どーでもよくなつ
てきたので、もういいか。

全部、明日の私に任せよう。

負け犬、今日はもうおやすみしたい気分。

「えつと。イルマちゃん？ 今日からよろしくね。セクハラしたら
殴るから」

「はい！ 不束者ですが、よろしくお願ひいたします！」

釘を刺した意味は、特になさそうな気がする。

ようやく、長い長い、一日が終わるつとしていた。

(6) 夢鬱な負け犬の愉快な仲間たち（前書き）

そういうえば今日、バレンタインデーなんですね。

むかつくんで、ちょっとかわいいフェオたん置いておきます。

これ、ちょっと^夢陶しい感じがしたので、

面が完全に切り替わった時以外は削除いたしました。

場

(6) 夢鬱な負け犬の愉快な仲間たち

その日の日覚めは、ノックの音ではなかつた。

何かに呼ばれたような気がして、重たい瞼を押し上げていく。

まず目に入つたのは、黄色っぽい、優しさを感じさせるような色

合いの天井。

その天井付近に漂うように何やら光源が浮かんでいた。

魔法。

一昨日までの私なら、そうだと氣付いた瞬間で、私は反射的に叫んだり飛び上がつたり、はたまた狂つたようにのた打ち回つたりしたことだろう。

だがしかし。

なんかもう昨日色々あり過ぎたためか、私は至極落ち着いた心持ちでそれを眺めていた。

負け犬、すごい環境適応。

自画自賛 もとい、自虐はさておき。

ゆつくりと体を起こす。

屋敷のゴージャスベットには到底及ばないが、なかなか良いフカフカ度合だつたためぐつりと眠れることが出来た。 ただ疲れていただけという説もあるが。

私の部屋と、そう変わらない広さの寮室。引窓は開けられていて、青い遮光カーテンがゆらゆらと揺れている。 日はまだ出でていない。入口付近横、普通に入れる広さのバスルーム、個別トイレ完備。玄関には残念ながら鍵はついていない。

と、どこぞの世界のマンション広告にでも書いてそういうことを言つたが、本当のことなので仕方がないのである。

「この世界の基本設定について。引用、初等学校の教師と私の、遠き日々の会話。

『今、私たちが普通に住んでいる家や建物ですが、あれは大昔の昔、人がまだ魔法を使えなかつた頃に色々考えて作つたんですよ。すごいですよね。人間、魔法なんかに頼らなくとも精一杯生きてたんですね』

『へえ、そなんですか。それはそれは、毎日汗水垂らして、せつせと働いていたんでしょうね。心底同情します』

『……フェオドールさん。そうやって歴史を軽んじてはいけませんよ。歴史というのは人間の成長日記。後ろを振り返つて、初めて見えてくる明日があるんです。 例えば、かの有名な魔女、コンスタンティ』

いつだつて楽しそうに歴史について語つてくる教師。

他の教師が、当時、無駄にませていてるよに見えただらう私に魔法が全くこれっぽっちも使えない私に、気味が悪い、気持ちが悪いと言わんばかりの軽蔑の眼差しを向ける中。

……あの教師だけは、いい話し相手が捕まつたとでも思ったのか、永遠と日が暮れるまで私に講義し続けていた。

まあ、そういうことである。

過去の文化、様式を、そこにあつたはずの何かをすっかり忘れて、魔法という裏ワザで代用しているのである。

全く。荒唐無稽、絵空事も甚だしい世界観である。

……ともかく。私は昨日サボつていた荷物の整理から始めよつと、布団を弾き飛ばしひげでから降りようとして。

「う、うわっ！？ お、おまつ、なんて恰好で寝てんだよー！？」

「…………んー？」

どこかで聞いたような、男の声。

……男？

寝ぼけている頭をもう少し動かして、声のする方へ顔を向ける。すぐ横だった。

燃えるような赤髪と、顔に『不幸です』とでも書いてそうな、目つきの悪い面構えが、なにやら顔を赤くしてベッドの傍らに立っていた。

「……イヴァ？……何してんの、こんなところで……」「田を擦りながらその顔に向かつて話しかける。　ただ単に魔法を見ても驚かなかつたのは、眠かつただけなのかも知れなかつた。疲れは取れているのに眠い。なんだか、5年ぶりの体験。そんなことをうつらうつら考えていると、イヴァが私に先程から何やら怒鳴つてゐるのが耳に入る。

「お、お前な、いへり5年間引きこもつてたからって言つても、だらしなさすぎるだー！昔は、異常なぐらい氣にしてたくせにー！」「……だらしない……？」

「ふ、服だよ、服ー　田のやつどひに困るから、ひとつと何か着るよーー」

「……ふーん。……服？……」

言われて、自分の着衣を見下ろしてみた。

しわくちゃの白いブラウス。黒いパンティは覆つてゐる生地が少ない。昨日、母親仮面に無理やり着せられた下着である。いつもはこんな口ちづくなの穿かない。

はて。

昨日、私は部屋に入つた途端、ベッドにダイブしておやすみしたはずなのだが。

つまり、ブレザー着用、セーター装備、スカートは当たり前。靴下もそのまま、靴さえも脱いだかあやしいぐらー。

どうして脱いでいるのか。寝ながら脱ぐなんて高等技術を習得した覚えはないのだが。

「だ、大体なあ！　昨日、夕食にも顔を出さなかつたらしいじゃないか！　ロゼから聞いたんだぞ！　幼馴染として心配して来てみた

らー」

ロゼ。

凄絶怪力鉄メイドから聞いた。

夕食。寮。女子寮。

女子、寮。

そういえば、こいつ男だった。そういえば私、今は女だった。なるほど、なるほど。疑問がぴたり繋がつて。

「な、な、な、なんであんたがここにいるのよ！？」

ようやく、私は晒していた身体を布団に丸め込んだ。

見られた。なんか知らないけど色々見られた。こいつに見られた。……も、もしかして脱がされた！？

羞恥で顔が赤くなるのが、さらにむかついた。怒鳴った。

「変態！ 死ね！ 男として終わってる！ 夜這いなんて男として終わってるわよ！ この生真面目むつり野郎っ！」

「む、むつり！？」

なぜか、イヴアが一番に反応したのはその部分だった。顔をさらに真っ赤に、激昂させて言い返してくる。

「ち、違、誰が、夜這いなんぞするか！ 大体、お前なんか襲う気にもならん！」

「な、なつ！？ 『なんか』！？ 『なんか』って言つたわね今！ あんた男のくせに、この体の素晴らしいしさがわかんないの！？ ホント男として終わってる！」

あまりにも、低次元な言い合いのため、以下省略

「 で、真夜中に忍び込んだと？ 乙女の部屋に？ 大の男が？」

「お前が乙女かという疑問はさておき、同室の人には悪かったと思つてるよ……」

イヴアは言いながら、私のベットの対称位置の寝床で、寝息を立てている人物の方を見やつていた。

何やら幸せそうな顔で寝ている イルマだつたか？

彼女は熟睡しているらしく、起きてくる気配は無かつた。

「まさか一人部屋だとはな。ロゼも違う部屋って言つてたし、一人部屋になつてんのかなと思つてたんだが……」

彼曰く。

昨日、式場でオカマ教師に連れて行かれた私が、夕食時にも顔を出さずにいたため、心配したロゼが男子寮のイヴアに頼んで（寮則第8条、異性の寮へは足を踏み入れず。呼び出すときは寮母さんを挟む）、夜、私の部屋へ忍び込み（3階）、慰めるようにお願ひしたらしい。

『私では、あのひねくれ面を見るとどうしても腹が立つてしまい、慰めるのは到底不可能なので、イヴア様がお願いします。肉体言語でも可』

……どうやらあのメイド、屋敷から出た途端に弱くなつた私に、今之内に仕返ししてやろうとでも思つてはいるようだつた。

「それにしたつて、問題あるでしょうが……」

「この男も、私の部屋へ忍び込むことに何の抵抗もないらしい。

色々問題が山積みだが、肉体言語を使用されなかつたことだけは、とりあえず不幸中の幸いだと思うことにしよう……

「 で、大丈夫なのか？」

なぜかきれいに置んでベットの下にあつた、制服を着直した朝、シャワーを浴びてからもう一度着直すが 私に、心配そうに言つイヴア。

「大丈夫。別に、なんにも言われなかつたし。今日からの学校につ

いては知らないけどね」

備え付けの椅子に腰掛け、出来るだけ明るく私は言った。嘘は付いていない。

彼はまだ心配そうにこちらの顔を窺っている。

「お前は魔法が使えない上に、あのホワイトヘッドが、学校からお前を追い出させようとするかも知れないんだぞ?」

「大丈夫大丈夫。どうせ、家の力を使うわけにもいかないから、ねちねち言うぐらいしかできないわよ。もし追い出されても、私は一向に構わないしね」

多分、娘の喧嘩にそこまではしないだろうし、出来ないだろう。

家ならこちらの方が勝つまさっているからである。

まあ、出来るのなら、むしろ追い出して欲しいものである。

頑張れ、白黒無色。ショラップネルなんかに負けるな、白黒無色。

負け犬、他力本願。

「……まあそれならいいんだが」

イヴァはまだ心配そうな顔をしていた。そんなに、私が深刻そうな顔でもしているんだろうか。眠たそうな顔はしているだろうけど……

しばらくして、彼は短くため息を吐くと、

「とにかく。何かあつたら、すぐ言えよ。俺はお前の幼馴染なんだから」

と言つて、私のベットから腰を上げた。

そのまま夜風が吹き込む窓に近づき、枠に足を引っ掛ける。

掛けたところで、私はまだ言つていなかつた言葉を思い出した。

「イヴァ。昨日は、助けてくれて、ありがと……」

その言葉に、背中を向けたまま片手だけ挙げて、彼は夜の空へ飛び出して行く。

同時に、魔法の光がぱつぱつと焼き消えた。

一度中途半端に覚醒してしまったためか、かなり早く床についたためか。

まだ暗い内に、私は荷物の整理を始めていた。

照明は無いので、明け方のうっすらとした光の中での作業である。厄介なことに、基本的にこの世界の明かりは全て魔法なのである。そのため屋敷では、約一年半かかって作り上げたランプを使用していたのだが、結構、死に物狂いで作った覚えがある。

何個もある革製のバックから、色々と引っこ抜き出す。

可愛らしい私服。純白のパジャマ。メイドに作らせたスリッパ（この世界には無いのだ）。いつの間にか私の下着が無く、母親仮面チヨイスの下着が入っていたりする中に、まぎれて、一本の剣。「これ……」

鈍い光沢を放っている鞘から引き抜くと、鞘と全く同じ材質の刃。私の肘までにも満たない刀身と、少し太めの柄。ただの小綺麗なシヨートソードもどきにしか見えないが、これでも立派な魔剣である。その証拠に、暗くてよく見えないが、ちつといルビーが柄のどこかに埋め込まれているはずなのだ。

家のシンボルマークにもなっている赤の剣と呼ばれるこの剣は、代々シユラプネル家が、この学院にお供として持つていいくのがしきたりなんだそうだ。

「まあこんなもの、使う機会は全くないだろうけど、自嘲して、私は鞘に戻した。

そんなこんなで、荷物の整理を終えた時には、田中さんと顔を出し始めて。

朝食まで一時間半を切った頃。

「イルマちゃん。朝ですよー。とっとと起きなー、とこつか起きてー」

一向に起きる気配のない同居人の耳元で、私は必死に起こうと呼び掛けていた。

そろそろ女の子として、シャワーを浴びて、色々な支度を終えるのにギリギリの時間なのだが。

……バスルーム、日の光が入らない。魔法の光がないと怖くて使えない。

いや、別に『お化けが出そうで怖い』とか、そんな乙女じみた理由では断じてないのだけれども。

とにかく。そろそろ起きて貰わないと困るので、揺すってみるのも考えてみたりしたのだが。

……ふと自分が元男だったことを思い出し、寝ている女の子に触れるのはダメな気がしていた。

「うう……」

負け犬、根性なし。

「むにゃ……んむー……」

同居人は私に容赦なく、相変わらずの幸せそうな顔で眠りまくっていた。

こうして、近くで黙つて見ていると、この子もかなりかわいかつたりする。なんだか守つてあげたくなるような、愛玩動物みたいな感じ。

「……何を考えているんだ、私は」

とにかく埒があかないでの、若干昨日の仕返しに、ほっぺたをブリブリにしてみることにした。

「……ん?……ふもー……つふふふ……」

なんだか笑っていた。寝ても、やつぱり変な子だった。まあ

笑うのは覚醒してきてる証拠なのだろう。私がそのまま突ついていると。

「うひひひ……ええのんか？……」」がええのんか？……」

「…………」

ん？

つんつん。

「ぬふふ……口では言えても、体は正直よのう……むふふ……」

「…………」

つんつんつん。

「あはは……そりかそりか、もう我慢できないのんか？……」」んの黒パンツなんか穿いて、いかにも純情派ぶつてる顔して、いやらしいよのう……ふひひひ……」

「…………」

へえ。

やつぱり、あんたか。

脱がしたの、あんただつたのか。

「…………うふふ……」

「これは本格的に釘を刺さないと、これから学校生活、授業はもちろんのこと、寮でも休まるところが無いとなると、精神的死亡確率が非常に上がってしまう。

寝ている女の子に暴力するなんて、悪い気もするが。

「うふふふふ……」

負け犬、涙を呑んで、殺らして頂きます。

「ふへへ…………ん？…………い、痛い！……つて、あ、あれ、フェオさまが2人？……つて痛たたた！……めちゃくちゃ痛い！……ふえ、フェオさま、お仕置きなら、お尻ぺんぺんとか、縛つたりとかの方がいいですよう！……あ、だめ、無理！……その関節そっちには曲がらなふげつ！？」

何とか間に合って、初めての朝食

「いやー、今日からフェオさまの天下が始まつていくのですね！
あたし、ドキドキワクワクしてきました！」

「いいから黙つて食べないと、今度は背中方向で右肘を左肘にくつ
付けるわよ」

……こんな感じのやり取りを先程からずっととしている。
この子はどうやら、昨日あの白黒無色（気に入った）と乱鬪騒ぎ
があつたところを見ていたらしく、どうしてかそれで、私のことを
神聖視しているらしいのだ。

……あの時の私は、みつともなく腰抜かしてたぐらいしか見せ場
が無かつたと思うのだが。

一体、この子には何が見えたのだろうか。

口の周りにケチャップをつけながら、彼女は手でガツツポーズを作
つた。

「フェオさま、あの偉そうな銀髪ヤローなんかぶちのめしてやつて
ください！ 夫として、毎晩関節技の練習に付き合つのもやぶさか
ではありませんです！」

反省して無かつた。

「……隨分と変なのに好かれたものですねお嬢様。さすが、類は友
を呼ぶとはよく言ったものです」

いつもの冷たい声が、脳髄に染み込む。

「あんたら、いい加減にしなさいよ……」

右隣にイルマ。左隣にロゼ。

左右からの温度差攻撃に、私は心底疲れ果てていた。

食堂。総勢600名前後入れる寮はいくつかに棟が分かれており、
それぞれの棟に食堂がある。

……馬鹿げた規模である。

その一つ、よりもよつて中心を席を陣取つて食事を取つているのだが。

もうお馴染みの注目度合だつた。

私、ロゼはともかく、イルマまで注目に見舞われる必要はないのだが、一緒に食べると言つて聞かなかつた。

あまり、私にかかると口クなことにならないと思つたが。
それに。

この子は、私のことを『あのホワイトヘッドに啖呵を切れる、すごい人』として見ているのだ。

今日一日の初日能力検査が終わつた後、一体どうこうになるか

想像には、難くない。

「はあ……」

本当に、問題は山積みである。

(7) 明らかになる負け犬の生態

「コンスタンティア魔法学院。

この魔法社会について。

なぜ、シュラップネル家やホワイトヘッド家などの金持ち 権力者に、あそこまで注目が集まるのであるか

それは人間が、魔法という力を持つて、その個々人の力の幅が極端に大きくなってしまったからである。

つまり、私というシュラップネル家の人が周りにどう見られているのか。

化物。

悪魔。

脅威。

恐怖。

触りぬ神に、祟り無し。

……そしてここは、子息という兵器を使って、自らの家の軍事力を顯示し合う戦争地域。

一週間生き延びる。

案外、ちょうどいい目標だとは、思わないだろうか？

一定クラスごとに、素敵要塞 もとい、校舎は別々になつた。

レベル別、つまり入学試験での成績で振り分けられているそうな。

つまり、私が今いるこの校舎がどこであるか。

「……そりやあね。分かつてはいたけど

もちろん、一番上だった。

ショラップネル家、権威を振りかざしまくっていた。

「…………金持ち死ね」

呟く。

「お前も、その金を使って引きこもつてたんだろーが…………」
横から鋭く痛い突つ込みが飛んでくる。

今さつき合流したばかりの、同じく金を使ってここに来たらしく、
イヴァだった。

「…………言つとくけど、俺はちやんと試験受けたるからな。実力だ」
「あれ？ 私、なんか独り言でも言つた？」

「顔に書いてる」

顔に出てたらしかつた。

まあそれはさて置いて。

一番上級クラスの校舎。特別外見上に変わりはない。かくかくし
た煉瓦風材質の要塞である。 ちなみに、「外からダイナマイト
(この世界には無い)で爆破しても、傷一つつかない素敵要塞」と
いうのは、なんと本当のことだった。

レベル別に校舎が分かれていると言つたが、二階かそこら辺より
他の校舎の方に橋が架けられており、同様に全ての校舎が繋げられ
ていて、まるでコンスタンティアドーム(入学式場のアレ)を囲い
込むかのような構造になつていて、

全ての校舎つて、一体何棟あるのだろうか。

「ホント、馬鹿げた規模……」

何度も思つたことを、再度口にする。

校舎に入ると、真っ先に掲示板が私達をお出迎かい。コルクみた
いな材質の盤に画鋲がびょうで紙を貼り付けている。

そこにはクラス表が掲示されていた。 どうのも、寮でどの

校舎が教えられただけで、詳細なクラス分けを聞かなかつたからである。勿体ぶる必要性は皆無だと思うのだが。

それでも、普通は取り立てて怒るほどでもないのだろう。ただ校舎に着くまで緊張感に苛まれるというだけだ。むしろ人によつては好まれるかもしれない。

だがしかし、私の場合は好むどころか、本当にいい迷惑なのである。ようするに

ばわわつ！

……私達が辿り着いたと氣付いた瞬間、掲示板の前で「ワー、キヤー騒いでいた人々が、一斉に飛び退いた音である。

「…………」

「まあ、こうなるわな…………」

どうにも、イルマから聞いたところによると、私と白黒無色の仁義無き戦いの行方が、生徒達の話題の8割方を占めているらしい。

『大丈夫です！ 私、お嬢様の可愛らしい寝顔とか人柄とか工口黒パンツとか、昨日の夕食時で広めまくつたんで、信仰力なら絶賛リード中です！ 何も問題はありませんです！』

……イルマちゃん、私の首を絞めまくつていた。

というか、夕食前にもう脱がしてたのか。 実は、脱がされただけで終わつてなかつたりするんじゃないんだろうか。

不安だらけ。

前途多難。

……だけど。

だけど、あの子は私を全く怖がりも、避けたりもしなかつた。

まあ、それも、昨日までのこと

「とにかく、ありがたくクラス表見して貰つとくか……」

「…………うん」

肩を落としていた私に、ポンつと手を載せてから、彼は掲示板へ

と近づいて行つた。

私もそれに続く。

周囲は、教室に続く廊下に移動するように見せかけて、ちらちらと振り返つてしたり、中には物陰に隠れて、様子を窺つていたりする。

……バレバレだった。

だが気にしていても仕方無いので、私は気持ちを切り替えて、表をじつくり眺めていると

「げえ」

思いかけず下品な声を出してしまつたりする。隣を見やると、そこには私と全く同じであろう、表情をしているイヴァの苦り顔。

「なあ、これ……」

「ええ……」

彼の咳きに私は頷いた。思つてはいることは、一緒だつた。

「そりゃあ、同じクラスになるわよね……」

がつくづくとうなだれた私を、ギャラリーは未だ興味深そうに覗いていた。

「あら、フロオドール。今日も朝からボディーガードを引っ提げて、あなたは自分の身も守れないのかしら」

誰の言葉かは、言つまでもない。

いつぞやの式場の時と同じ面で、部屋の中心の机でふんぞり返つていた。

私は無視して、自分の席に腰を掛ける。ちなみに席順は、どういつた理由なのかランダム方式で割り振られているのだが。

まさか席まで隣になると、一体これは何の陰謀なのか。

これはもしかすると、シュラップネル家、ホワイトヘッド家双方が、

私が考へつる限り最悪のシナリオで戦争をするつもりなのかもしれない。

つまり 娘達で競わせよう、的な。

いや、最前線先発者って自分で言つていたよつて、気付いてはいたのだが。

「あははは、イヴァ、どうしよう、私泣きそつなんだけどー」

「いてつ、ちよ、何で俺を殴るんだ！」

前の席になつていた、ボディーガード、もといイヴァの後頭部に八つ当たりをしてみた。

……軽くだつたのに、拳が痛くてびっくりした。引きこもり負け犬、体の貧弱さは底知らず。

と、そんな私達の様子を見て、アナ斯塔シアは呆れ顔で、「本当、仲がいいのね。いちゃいちゃと、見苦しいので止めて貰えないかしら

「……ふえ？」

「いぢや、いぢや……？」

なんだか、理解できないことをのたまつていた。

さすがにこれは無視できなかつた私が、どんな罵詈雑言を擁して否定しようかと考えていると。

「ち、違う！ 誰がこんな自意識過剰で陰気を周りに押し付けていく迷惑女と、いぢやいぢやなんかするか！」

「……え」

先手を打つて、否定したのはイヴァだつた。

随分きつぱり、罵詈雑言を用いて否定してくれていた。

別に、何も問題は無い。

無いのだが。

「あ、その、違うんだ、フェオ、今のは言葉のあやだ！ そういうことだから、俺が普段からお前の事をそういう風に思つてゐる

とかじやなくて

なにやら、私に向かつて必死に弁解している。

「あはは……」

よく分からぬけれど、慌ててかわいそつだつたので、私は天使のよつな笑顔で彼を諫めることにした。

「なに焦つてるの？ 別に全然怒つてなんかないわよ。今日の朝も、散々、言われたし分かつてるわよ？」

その横で、またいらないことを言う奴がいた。

「振られたわね」

……ぴしりつ。

なにやら、体の中から決定的な何かがひび割れた音がした。

本当に

本当にこの女とは、恒久的に相性が悪いようである。いつまで、私の力に触れるとは、いやいや、なかなかの才能である。

私がついに我慢できなくなつて、その女に怒鳴ろうとした刹那「はいはーい。みんな座つて座つて。今から出席取るわねい

……オカマ教師が出現した。

あんた、最上級クラスの担任だつたのか。

多分、この教室が、最優等生　化物どもの集まりなのは間違いないだろ？

計25名ほど。だいぶ少數だつた。

木製の表面がつるつるした机に、椅子。……どこかで見た覚えがある配置。

ちなみに、ロゼは一つ下のクラス、イルマは一番下の棟。イヴァが優秀すぎるのが腹立たしい。

……そして、本当の私は青空教室にでも入っていることだらう。
負け犬にはお似合いである。

「じゃあ、今から能力検査を行うから、各自更衣室でトレーニングウェアに着替えて、第三グランドに向かってねい」「ふと聞き流していたオカマ口調に耳を傾けると、そんな声が聞こえてきた。

能力検査。

魔法不能者が暴かれる瞬間。

とうとう、ここまで来てしまつたらしい。

「はあ……」

もう諦めているのだが、ため息が出る」とぐらには許してほしい。
負け犬、本当に憂鬱な気分。

「……フェオ、大丈夫か?」

前から振り返つて、イヴァが心配の声をかけてきたりするが。
「別に。私と話してると陰気がうつるらしいから、もう話さない方がいいんじゃないの?」
ああ、こつこつと自意識過剰つて言つのかな」

ふつきらぼうに言い放つ私を、彼はジト目で見つめていた。

「……お前、案外根に持つタイプなのな」

「そうね。陰気らしいからね」

「いや、だから機嫌直せつて」

「自意識過剰、陰気女は、一度言われたことを深く根に持つて、来世まで持参していくのが趣味なのよ」

「……あつそ……」

黙らしてやつた。

なんとなく、微妙な満足感に浸りながら、周囲に合わせて席を立ちあがめとしたところで。

ガタつ !

勢いよく教室の扉が開いて、続いて一人の教師が入つてつくる。

ん？　　という生徒たちの視線の中、オカマ教師の方へと小走りで近寄り、なにやら耳打ちして、また小走りで教室から出て行った。まるで風のように通り過ぎて行つた教師を見送りながら、なにか問題でも起きたのだろうか　などと考えていると。

「えーと。ちょっと変更ー。今から女子は何も持たずに第一多目的、男子は　適当に暇でもしといてー」

こきなり、予定が変更された。しかも男子、適当に暇しといて発言。

……この世界はどうやら男卑女尊だった。元男として複雑な気分。取りあえず、生徒として言われたからには従わざるを得ないので、余計な詮索などはせず、特に疑問も持たずに、私は指定された場所に向かうこととした。

「じゃあね、イヴァ。精々陰気女らしく、後ろ向きに恥を晒していくわよ」

「……ああ、行ってー。もう何も言わん」

ブイツ、と顔を背けて、いじけてしまつた彼に手を振りながら、教室を後にした。

横でニヤニヤ笑つている、奴に気が付かずに。

私が、前世男だったことを思い出したのは、実は結構年が上がつてからなのである。

小さい頃から、薄々何かの記憶があつたとは思つたのだが、完全に自覚したのは一桁ぐらいからだ。

……逆にそれがいけなかつたのだろうか。

急に意識し始めてしまい、今ですら私は、自分の体をじつくりと見たことは無い。

お風呂に入るときは、タオルを身体にがっちり巻き、洗うときは

目を瞑^{つぶ}る。

トイレをするときは、音が聞こえたら耳をふさぎ、拭くときは手の感覚オンリー。

着替えをするとときは、目を瞑るのは当たり前、布擦れの音も聞きたくないぐらい。

一体、何をしてるのだろうと常々思つが、この素晴らしい体を、薄汚い男の情欲に曝^{さら}したくないのである。

無抵抗の女の子を、眺めるとか襲つたりとか、そういうのは男としていけない、というのが負け犬ポリシー。

……不可抗力は、どうしよう。

「ひええええ……」

一応言つておぐが、これは私の声である。

第一多目的うんたらとかいう部屋の隅つこで、おやりく顔をびっくりするほど真紅にして、恰好のせいどうずくまるこどもできず、必死に目を瞑^{つぶ}つて突つ立つてている私の悲鳴である。

上は下着を外して、直に来ているブラウス、下はスカート、靴下を脱いでいる。なんかマニアック。

クラスメイト達も、同じ格好をしていることだろう。床に脱いだ服がちらつと見えた。

ちなみに、前途のように誇り高き元男として、能力検査と言われたとき、私はトイレから着替えるつもりだった。一応。

「はーい、じゃあ次はヒルダさん、お願ひします」

一体どういう順番なのか、一向に、私が布厚カーテンの内側に呼ばれる気配は無く。

身体測定。

魔法が社会の根底にある世界で、体格ほど無意味なほどはないだろ。

ならなぜ？

決まつていい。

こんな、私のピンポイントな弱点に触ることをできる奴なんて、

決まつていい。

「あら、フュオドール。そんな隅っこで精一杯ブラウス引っ張りながら、自分の貧相な身体でも隠しているつもつ？」

誰の言葉かは、言う価値もない。

「…………なんで身体測定をやつてるのかは置いといて、どうして運動着でやらせないのよ…………」

下を向きながら呻くような私の問いかに、そいつは恐ひへ一ヤリと不敵に笑つていたのだろう。

「決まつてるじゃない。あんな分厚いトレーニングウェアじゃ、体重やら股下やら、どうせまた脱がないと正確に測れないからよ」

この女

どうやら、まずはスタイルで勝負するつもりらしかつた。

正直、まるで理解できなかつた。著しく馬鹿馬鹿しい。もう痴呆が来ているのだろうか。驚きの白黒を加減の肉体には、脳髄の代わりに何が詰まつていいのだろうか。

「増えるワカメ……いや、それは意外性に嬉しいか。なら濃口醤油薄味とか……」

「…………何を言つていいの?」

現実逃避にすら突つ込んでくる。死んで欲しかつた。

その時。

シャツ とこれは、向こう側を隠していたカーテンが、勢いよく開いた音なのだが。

…………なぜ開けたのだろう。

「じゃあ、最後にアナスタシアさんと、フュオドールさん、お願ひします」

「…………はい?」

それはつまり。

公開、処刑?

……今、私に魔法が使えたのなら、
灼熱玉ファイヤ・ボールの一つでも、所構わず
ぶつ放したいところだ

(8) 魔法不能者負け犬の醜態

結論から言わせて頂く。

負け犬VS白黒無色。

惨敗だつた。

完膚なきまでに、完全無欠、これっぽっちの嘘偽りなく。

…………敗北。

あんな女の子達の前で、まともに見られない自らの裸を顕わにして、頭から爪の先まで隅々至るところを触診される屈辱を受け。そして、得られたものは。

唯一の自信を、自慢を、存在価値を。

打ち砕かれた、負け犬完全体だけ。

「…………元気出せ、なんてもう言わんが、落ち込んでる暇はないと思うぞ」

先程まで、教室で暇をしていたイヴァアが、まだいじけているのか遠回しに慰めてくる。

第三グランド。

私達の教室がある校舎の裏手、広大な黄土色の広場である。

その後、更衣室でトレー、ニングウェアに着替えて 私は挫けず にトイレで着替えた 、当初のスケジュールを再開したのだ。

ちなみに能力検査とは、入学試験で一応の実力は測つたものの、授業初日で、再度その実力を確かめてやろう、という趣旨のものである。

この結果によつては、その場でクラス編成まで変わることもあるらしく、他の人達は念入りに準備体操をしていたり、呪文を唱えたりしている。

…………準備体操？ 一体何すんの？

と、言われるかもしれないが、実はこの魔法と言つやつは、身体

能力を高めるものが基礎にあり、まずはそのテストというわけである。

横手には、まず初めの項田らしい、直線200メートルぐらいのコースが作られていた。

だが。

「別にもひどいだつていいわよ」

心底どうでも良也會うに聞こえるように、彼に私は言った。そう。

もうどうでもいいのだ。

たつた一つの、お豆さんほどのプライドを踏み潰された私には、やる気など潰れカスほども残つてはいない。

負け犬、かなり堪えていた。

「はあー……」

そんな私を見かねてか、イヴァは長いため息ひとつ残して、私の隣から別の所へと離れていった。

そんなこんなで、200メートル走の始まり始まり。

スタート地点とゴール地点に一人ずつ教師がついて、男女関係なく生徒が一人、コースに並んで、なぜか魔法で鳴らしたピストル音でスタートしていく。

……そんなところまで魔法で真似をするのか。火薬などを作る気はまるでないらしかった。

とにかく、スタートして　すぐゴール。

これの繰り返し。何の見応えも無い。速すぎて、なんだか呆れすらしてくる。

初等学校の時は、まだなんとか誤魔化しが効くほどだつたのだが、さすがに満16歳　この学院の化け物達ともなると、当たり前だが次元が違うらしい。

そして、着々と時間が流れていき。

「じゃあ最後に」

……もう分かっているので、わざわざ最後とか言わないで欲しかった。

私は未だスタート地点付近に残っている、もう一名の方を見やる。「はんっ。お手並み拝見、つてところかしら？」 フュオドール長い白髪を手で払い除けながら（くくればいいのに）、いつもの不敵な笑みは絶好調で、私をねちねちねつとり見つめていた。

私はもう、何を言う気力すら残ってなかつたので、無視してスタート地点に着いて。

「まあ、なんとか全力で走つてみるよ。案外何とかなるかもしけないぞ」

……その私の横に、もう一人いた。

なるほど、男女25人だから、2では割り切れなかつたのか。どうりで3レーン作つていたわけだ。 別に先に一人走らせてもよかつたんではないのか、という疑問はNGである。

「何とかつてなによ。私みたいな人外にどうしろつていうのよ」

藍色のトレーニングウェアに映える、燃えるような赤髪に向かつて私は不満をぶちまけた。

すると、彼は困ったような、苦笑したような顔をしていた。

「そうやってなんでも後ろ向きに考えるなよ。頑張つている姿を見せねば、他の奴だつて偏見とかしたりしないって」

なにやら、見当外れな甘々ちゃん丸出しなことを、言い励ましてきたところで、「ほら、スタートするから」と教師に急かされ、もう一人も含めて準備が完了する。

クラウチングは無し。それは真似していないようだつた。つづくづくよく分からぬ風習である。

そして。

スタート。

パンツ ！

ピストル音が、だだつ広い天空に鳴り響いた。

三者三様、揃い踏み、力いっぱい大地を蹴り飛ばし、足底の下には土吹雪が舞う。

そのまま、大きく前方へ一歩踏み出し、いざゴールへ
グキッ！

..... 実際には、そういう音はしないものだらう。だが、
痛みとか力のすっぽ抜け具合的には、表現は決して間違いではない。
続けて。

ベしゃっ！

と、これは私が、地面と思いつきりキスをした音なのだが、ファ
ーストキスがこんな、リンゴがゾウに踏み潰されたような音で終わ
ってしまうとは、いやはや、情けない情けない。

などと、脳内逃避した後

「い、いにやあああいいいっ！？」

例のごとく、転げ回った。

痛かつた。

死ぬほど痛かつた。

歯が折れたかもしれない。

顎が外れたかもしれない。

鼻が潰れたかもしれない。

「ふううええええええ！」

奇声を上げながら転がった。砂が撒き上げられ、砂塵が舞い、目
についた土が涙で固まつた。

「ふえ、フェオドールさん！？」

教師が慌てて、駆け寄つてくる足音が聞こえるが、私の痛みに対
する防御適応はしばらく終わりそうも無かつた。

続いて。

屋内である。名称は訓練所、実際はドーム型の体育館のような建物だ。

先程の後 ちなみになんと、イヴァが全生徒基礎一位に輝いていた 、屋外の測定はまだまだ色々あったのだが。
……正直、ここまで酷いとは思っていなかつた。

自慢だが、引きこもる以前は周囲に合わせようと、かなり運動神経も良かつたはずなのが。

いや、なまじ良かつた記憶があるためか、さらに惨たることになつていた。

結果だけを、ここに言つておこう

200メートル走、リタイアしかけの4分13秒。

10キロ持久走。1キロでリタイア というか長すぎるだらう。せめて2キロにして欲しかつた。

その他にも、よく分からない腹筋のよつな、腕立てもどき、握力測定らしき は全て学校最下位。私達のクラスは一番最後だったため（なぜかは言つまでもない）、他のクラスの結果が全て出切つていたのだ。

本当に散々だつた。

あまりの悲惨さにクラスメイトの視線が点になつていて。比喩ではない。

……せめて、もう少し運動しておくれべきだつたのだ。そうしておけば、あの女にウエストまで負けることはなかつただらう。別に負け惜しみなどではない。

なにはともあれ。

もつとはつきりと、負け犬が挙める舞台の、『』登場である。

「では、最後にフェオドールさんと、アナスタシアさん、お願ひします」

何度も聞いたくだり。

……本当に、気が進まない。

指定されたラインに、私はおぼつかない足で、ふらふらと近寄つていぐ。今日一日で、引きこもりの体はくたくたに疲れ切つっていた。ようやく線に到着し、覚悟を決めるよう一度嘆息してから、ゆっくりと顔を上げる。

少し離れて、人型の物体 素敵要塞外壁と同じ材質らしい。それが目標になつていて。わざわざ人型にしてるとこうなどが、いやらしい。

「 そろそろ、本氣を出したらどうなの？」

と、このいらっしゃつきを滲ませていてる声は、隣のアナ斯塔シアのものである。

全てにおいて、同時にテスト出来るようこじていてる辺り、さすがだつた。

「いい加減、あなたの演技には飽き飽きしてきたんだけど」この女はおめでたいことに、私が手加減している、とでも勘違いしてこるらしかつた。本当にそうだとすれば、私が随分と身を張つた芝居を売つていて、とでもいうのだろうか。

顔面を強打し、足をつつて絶叫を上げ、明日には最下位クラスに飛ばされるのを、親に恥をかかせて止めてもらつのが？

………… 最後のはいいかもしない。

そうだ。精一杯、恥をかかせれてやればいいではないか。の人達が何を考えているのか知らないが、この負け犬をここに放なつたことを、精々後悔させてやる時が来たのだ。

「 …… そうね。そろそろ本氣を出そうかな」

わたしは、睨みつけてくる彼女に、ニヤリと笑い返してやつた。

アナ斯塔シアはふんっ、怒氣をちらしながら顔を逸らして、目標に向かって片手を掲げ。

宣言した。

「本気でやるわよ」「
途端、彼女の口が、まるで急加速したかのよつこ、言葉を紡ぎだす。

呪文

その言語が、自らの魂^{アーナ}で、体外の生命^{アーナ}を操作し。

生成し。

拘束し。

具現化する。

最後に、魔法名を叫べば、完成だ。

……立派な、化け物の、出来上がり。

「氷零炎爆槍！」

彼女の手のひら付近に、じるじる小さな、白い冷氣のよつな霧が現れて

一気に爆発的な速度で膨れ上がり、前方に向かつて、まるで槍のよつに、空間を貫く。

そして目標に収束した瞬間。

大爆発の衝撃波を辺りにぶちまけた！

「きやああああつ！？」

……私は情けなく悲鳴を上げながら、身を必死にかがめていた。その間も魔法の効果が撒き散らされる。

空気が歪み。

空間が軋み。

振動が飛んで

徐々におさまっていき……止んだ。

「……終わった、……の？」

恐る恐る、私は頭を上げながら、術者に尋ねるように声を上げた。そこには、満足げに笑う、いつものアナスタシアの姿。それから。

「す、すごい……」

教師が驚嘆の声を上げている。

それもそのはず

私が目標の方を見やると、そこには、何もなかつた。
あるべきものがなかつた。

これまでの全ての魔法を受け止めてきた人型が、跡形もなく消し
飛んでいたのだ。

つまり ダイナマイトよりは、上だつたといつわけだ。

「まあ、さつとこんなところかしら」「ひー

彼女は教師が驚いたのを見て、偉そうにふんぞり返つている。

……無性に腹が立つた。小さくぼやぐ。

「魔法制御のテストなのに」

「……聞こえてるわよ。ほら、さつとあなたもやりなさい、フヨ
オドール」

ぼそつとした咳きにも、田代とく突つ込んでくる。本当に腹立た
しい奴だった。

「はいはい、やるわよ、やつてやるわよ。やればいいんでしううが」「
内心のむかつきを抑え込みながら、立ち上がる。

……立ち上がった私を、なにやら周りがワクワクした田で見つめ
てきたりしていたが、おそらく、5分後あたりには、シーンとした
目をしているであらう。

ただ一人、イヴァだけは気遣わしげな表情をしていた。

昔から、いつだつて彼は、私をそんな風に見守つていた気が
する。

全く。出来損ないの幼馴染がいると、彼にとつては迷惑に違ひな
いだらう。

後で、一応謝つておこう

……私は、彼らから視線を外し、もつ一体の人型を見据える。

それから、身体の前に、掌底を突き出すように構えた。

大声を出すコソは。

喉よりもお腹で出す感じ。

大きく息を吸い込んで。

そして、私は、叫んだ。

「ファイヤ・ボール
灼熱玉！」

間髪入れず もう一度、叫んだ。

「ラグト・ボルト
白電撃！」

「エル・スタック
叫びまくつた。
火灼靈！」 赤焰核魔砲！ ルーク・フレア
肉小麦！」 マウドナ・ルド

さらにもう一度

「ちょっと待ちなさいよおおおつ！？」

叫ぼうとしたところで、横槍が入る。

私は、半ばうんざりした顔で何事か聞いた。

「何よ」

「『何よ』、じゃないでしょがつ！？ 呪文はどうしたの！？ 最後のは何なのよ！？」

「呪文は覚えてないわよ。ってかあんた、最後に突っ込むとは、なかなかやるわね。見直したわ」

「『見直したわ』、じゃないわよおおつ！？」

なかなかキレのあるツッコミだった。『何よ』とかしつかり私の声真似までしていた。

この女、意外に気が合つかもしない。新たなる可能性。などとthoughtしている。

「呪文を覚えて……ない？」

「え？ どうこいつこと、なの？」

ざわざわと

ギャラリーが、私を困惑の眼差しで見つめていた。

教師が、私を驚愕の面差しで眺めていた。

……それはそうだらう。後者の魔法はともかく、灼熱玉の呪文を覚えていない人間など、この世にはほほ存在しない。初等で、人生で、一番最初に習つであろう対魔物攻撃魔法。それほどポピュラーな魔法なのだ。

それを知らない人間なんて

「本当に、いい加減にしなさいよ、フヨオドール！ 馬鹿にしてるの！？」

彼女はついに激昂して、私の胸ぐらを掴み拳げてくる。

背の高い彼女に若干持ち上げられながら、私は、心底氣だるそうに、告げる。

「馬鹿になんかしてないわよ。だつて私は」

それを知らない人間なんて

人間じゃない。

「 だつて、私は、魔法不能者だから」

人間になりきれなかつた、一匹の負け犬。

全て終わつて、寮。

私を待つていたのは、数々の視線。それはいつも通りなのだが
なにやら、違つた。

何が違うのかを説明することは難しい。

だが、おそらくこのカンは外れてはいないだろう。
とにかく、彼らの脇をすり抜けて、私は自分の部屋へと戻つてい
つた。

すぐに、到着した。

3階。

こんなに近かつただろつか。

人は、楽しい時間ほど早く感じ、辛い時間ほど遅く感じるものだ

と、誰かが言つていたことを思い出す。

楽しい？

分からぬ。

だが、今が辛い時だといつこと分かり切つていた。

どんなに付き合いが短かるつと、拒絶される」とは……辛い。

ほんの数回口を交わした程度。

あの、憎きアナ斯塔シアよりも、話した回数は少ないかもしだい。

「関節は決めたけどね……」

独り言を言いながら苦笑する。思い出し笑いは良くないと思つたが。

……とにかくにも。

扉の前で、ずっとじりじりしていても仕方がないので、初日と同じように、私が大つ嫌いなノックをしようとして

「フヨオさまー？」

「え……」

すぐ傍にいた。

栗色のふわふわの髪の毛を揺らしながら、まん丸い目を、さらに丸くして下から覗き込んでいた。

「イ　　イルマ、ちゃん？」

私は、思わず彼女から数歩後ずさつていた。

……情けない、負け犬。

こんな風に、怯えるくらいだつたら、初めから「魔法不能者です」とでも言つておけばよかつたのだ。

本当に、情けない。

だから、私は彼女に、もう手遅れだろうが、せめてものケジメとして直接伝えようと、爪の垢ほどしかない勇気を振り絞つて言おうとした。

「イルマちゃん、私

「フヨオさまー、何やら一ヤーヤして、いいことでもあつたんですか？」あ、もしかして初日でだれか一目惚れでもしたんですか？

つてダメですよ！あたしといつ夫が居ながら浮氣は

「私、魔法不能者なんだけど…………って、え？」

勇気を振り絞つた私を。

……粉々に打ち砕いてくれる弾丸トーク。

「いやまあ、たまにはいいかもしませんけど、何といふか、一分までしかダメつていうか何といふか、つて一回でもダメじゃないですか！あれ？……んー。とにかく浮氣はダメなんです！」

ダメ！のつと不倫！

「…………」

体全体でバツテンマークを表現していた。

……それに打ち砕かれた私は、黙つて扉を開き、部屋の中へと足を進めた。ついでに扉まで閉めたりした。明かりがつけられなかつた。

夕食後に、話そう。

引きこもり思考全開の後回しだった。

(9) 開き直った負け犬の覚悟（前書き）

タイトルの都合上、今回は短い上に、完全に前回の補足みたいになっています。

レイアウトを変更いたしました。

(9) 開き直った負け犬の覚悟

結局、あの後すぐに話して。

「あ、それならあたし聞きましたよー。噂には早い友人がいるものでして」

「……へ？」

再度私を打ち砕いてくれた。

お互いベッドに腰掛けで、私は真剣な面持ちで、彼女は気楽な表情で。

「え、えと。私が魔法不能者、つてこと、だよね？」

「そうですよー、フエオさま。つてか魔法ふのーしゃ？ つてなんですか？」

「…………」

「どうやら、意味が分かつてなかつたらしい。

「だから、魔法不能者ってのは、魔法が一切これっぽっちも使えな
いってことなんだけ……」

まんまな説明をする。

「それは分かるんですけど、そんなことつてあるんですか？」

「え？」

「魔法が使えなかつたらですね 火が起こせない！ 明かりが点
けられない！ 魔物が倒せない！ 力が湧かない！ つてかそもそもそ
も魂がなーい！ 生きられないよー！ ………………みたいなふうにな
るんじやないですか？」

大仰な身振り手振りで、順々にポーズなどを取つてイルマ。テン
ションから表情までころころ変わつていて、なかなかの演技派だつ
た。

「まあ、そうかもしれないけど
言われて、私は曖昧に頷く。

確かに、イルマの言つていることは間違つてない。

実際に、あの初等学校の教師にも言われたし、ロゼやメイド達、ベリル 妹にも、言われたことがあることだつた。

火が起こせない、明かりが点けられない、傷が治せない、魔物が倒せない。

依然に。

「魂がない。生命がない。」この世界で、生きれるわけがない。だけど。

「……実物がいるから、あることなんじゃないの」としか言いようがなかつた。

彼女は、んー、と可愛らしく首を傾げて「そーいうもんですかねえ」と、まだ納得はできないよつだつた。当然かもしれないが。

……ん？

「ど、とこいつがイルマちゃん。私のこと、その、なんとも思つてないの？」

「ふむ？ なんとも つて、大好きです！ フェオさま！ 夫ですから！」

「いや、そつこいつじやなくて 」

「この子は。

この子は、ホワイトヘッドに喧嘩を売れるほどの、シユラップネル家の魔道士である私に幻想を抱いていたのではなかつたのか。ならば、仮に魔法不能者じやなかろうと、今日散々な醜態を見せつけた私に、幻滅していなはづがないのだ。

「……そうじやなくて。イルマちゃん。私のこと、軽蔑したり、騙された、とか思わないの？」

「はい？ けーべつ？ 騙、された？」

騙したのだ。

例えその気がなかつたとしても、私は、彼女を騙した

「フェオさま！」

「……ふえ？」

その時いきなり、強い怒氣の声が張り上げられた。無意識に下がつていた顔を上げると、そこには、初めて見るイルマの表情があつた。

真剣に、怒っていた。

「あたしは、そんなことでフェオさまを嫌いになんかなりませんですよ！」

そんなこと。

そんなこと？

「あたしが大好きなのは、ロゼさんや、あの赤髪の人と、楽しそうに笑い合っているフェオさまです！ 怪物だの、目立ちたがりだの、偉そうだの、周りからどう言われても、どう見られても、へーぜんと、いつだって凛々しいフェオさまです！」

……やっぱり、私周りにそういう風に見られてたのか。

「どうか、私イヴア達とそんな楽しそうに話してたつけ。など、他にも色々つっこみみたい部分があつたが、そんな暇なくイルマの声は、さらばヒートアップしていく。

「それなのに、こんなことを気にしてどーするんですか！ そんなまるで纖細な薄幸の少女みたいなの、フェオさまじゃありません！ もつと図太く、こう、周りを見下したような目で、唯我独尊、我が道突き進む的ないつものフェオさまに戻つてください！」

「…………」

全て言い終えたのか

彼女は肩で息をしながら、私の顔を窺つていた。

いつの間にか、話しながらベッドから移動していく、すぐ私の目の前までいたりする。

そして。

私が動く。

「……フェオさま、いきなり立ち上がってどうし、い、いたた

たつ！ な、なんですか！？ 感動シーン的な、そういうのない
んですか！？ あ、もしかして照れ隠しですかー？ それなら夫と
して、やぶさかでは つて、ちょ、無理！ それ以上いけないつ
！」

すぐ後のこと。

バンつ と勢いよく戸が開いた。

「お嬢様！ おじょー ････

同時に、メイド服が勢いよく部屋に滑り込んで、すぐ黙り込む。

来客に、私は至極普通の対応として、要件を聞いてみた。

「なによ口ゼ。そんな慌てて。何かあったの？」

そこには口ゼが、何やら顔にびっしり汗をかいて、直立していた。

「…………お嬢様。あなたが一体どうこう性癖をしてようが、そんなことはどうでもいいのですが、一応何をしているのかだけはお聞かせ願えませんか」

「んー？」

大方私が心配になつて、走つて部屋まで飛んできたといふところだろう。

まったく、いつもは無愛想で鉄仮面なのに、こわといつときは本当にかわいいメイドさんである。

私はそんなことを考えながら、なぜか荷物に入つていった縄で、イルマちゃんを縛り上げる手をせつせと働かしていた。

「ちょっとね。関節を決めたついでに、昨日の晩、一体私に何をしたのか拷問しようかと。あ、お母様と一緒にはしないでよ。あの人は趣味だけど、私は仕方なくなんだから

そう。仕方なくなので、何も問題は無い。

気絶している女の子に、暴力はNGという負け犬ポリシーは、身の安全には敵ないのである。

「……言つておぐが、私が昨日やられた縛り方ではない。普通にぐるぐる巻きにしているだけである。一応。

「……何も、口出しうる気はありませんが……」

その様子に、若干呆れを感じさせながら言ひ口ぜ。と、そこで。

「 で？ 慌ててどうしたの？」

わざわざ分かりきつたことを、私は聞いた。にやけながら。

彼女はその表情の意味が分かつたのか、即座に懐から出したハンカチで顔を拭う。

そして何事も無かつたように取り繕つてから、理由を述べた。頬はまだ紅潮していたが。

「お嬢様。宜しかつたのですか？ あんなはつきり『魔法不能者』などと言いふらして。もう、誤魔化しは効きませんよ」

やや私を睨みつけながら言ひ。びつやひ、尊ヒヤヒナモトヒビのクラスに広がつてゐるらしき。

だが。

それはもう、私の中では解決していた。

「 いいのよ、もう。実際隠そつが、隠すまいが、私に魔法が使えるわけじゃないしね」

半ば自嘲氣味に言ひ。

「 ですが、仮にも、シユラップネルの人間が魔法が使えないとなると、恥を晒すだけでなく、下手をすれば命の危険にまで及ぶ可能性があります。それでもいいのですか」

ロゼは語氣を抑えて、静かに私に警告した。

命の危険。

当然、なぜこんな家^{いえ}が大きくなつたかを調べれば、それに虫のようになつぶされた人達などが、腐るほどいることが分かるであろ

う。

それでなくとも、偉ぶつて気に食わないなどと思つ輩など、それこそ掃いて捨てるほどいる。

そして私は、ちょっとしたちょっとかいで、死ぬ。

殺そなごと大層なことを考へる必要はない。魔法訓練時に「手が滑つたー」とでも言いながら、灼熱玉ファイヤ・ボールでもぶつけてやればいい。びっくりするぐらい、あっさり死ぬ。

開き直つても、私は負け犬なのだ。

……そして、それが私だ。

負け犬。

ひねくれ者で、我が儘で、引きこもりで、自意識過剰で、実は目立ちたがりで、偉そうで、後ろ向きで、臆病で、傍若無人で、怖がりで、他人に陰気を押し付ける迷惑女。

だから、私は。

「私の専属守護隊長さんに、期待してるわよ」

意識したのは、あの女の不敵な笑み。

彼女は心底呆れ果てた、とでも言つた風に、ため息をついた。

(10) 一人相撲負け犬の隠された力

「はーい。イルマちゃん、あーん

「ふえ、フエオさまー、あたし、ピーマンは嫌いなんですよー」「イルマちゃん、ダメだよ。好き嫌いしてると、大きくなれないわよ?」

「大きくなれなくていーです。フエオさまぐらいの大きさがちょうどいいんです」

「あははは、イルマちゃん。それどうこう意味? 場合によっては、このままトマトスープに顔を突っ込んでいいんだけど」「い、ごめんなさいです! 悪い意味で言つたんじゃないんですね。うー、だ、だから、スープの距離縮めるのやめてくださいですうー。」

と、まあ何をしているのかと言ひつと。

夕食。またしても食堂のど真ん中で。

ミノムシよろしく、ぐるぐる巻きにされているイルマちゃんに、事前に見当をつけた野菜料理を食べさせてあげているのだ。

「つふふ……」

……すいじく、楽しいです。

思わず顔がほころんだ。

「ほら、さつやと食べないと、こつまでたつても終わらないわよ? 私、一度やるつて言つたことは、必ずやりきる主義だから。楽しいことは」

「ええつー? む、無理です! 鬼畜です! こんな青赤黄色の物体なんて、人間に食べられるものじゃないですよー!」

例の「い」とく注目はされている。

しかし、そんなことを気にする必要はもつ無い 初めから気にしているという説もあるが ので、普段の私通りに行動することにしたのだ。

そう、これが屋敷にいた頃の普段の私。基本的に気分と思いつきで行動している。

ロゼが魔法にビビりまくる私のことを、意外だと言つたのもこれが原因なのかもしね。

……ロゼ？

気が付いて、左右を見渡す。すぐに見つかった。

「…………ロゼ。何してるの」

「いえ。お嬢様の嗜好のことは本当にどうでもいいのですが、余りにも見苦しいので、離れてみました。5メートル程」

……ドン引きしていた。

凄絶怪力鉄メイド、職務放棄。

さすがに上役として、私は注意する。

「いや、あんた私の専属守護隊長でしょうが。ついでにカリ氷零炎ゼル・ブレイズ爆槍ブローバンでも飛んできたらどうするのよ」

「大丈夫です。今のお嬢様は、テコでも死なないと私は思います。心配して損しました」

なんだかむくれていた。

本当に、心配してくれていたらしい。

どう言つべきなのか とにかく意外である。

私のことを心底嫌つてはいるが、メイドとして仕方なくついて来てくれているだけのはずなのだが。

というか、そういえばメイドって別に身体警護の職じやないと思つんだけど

といううソッ「ナマケモノ」なのだろうか。

と。

「あのー」

注目の輪から、一步踏み出して話しかけてきたのは、見知らぬ女性。

そういえば、これだけ視線に遭いながら、話しかけられたのは初

めてのことである。

「は、はい？」

緊張して、ちょっとどもり気味になってしまつ。

その生徒はかなり長身で、男前でカッコイイという表現がぴつたりな風貌をしていた。

後頭部を片手でポリポリ搔きながら、もう片方の手を差し出してくる。

「これなんだけどね……」

その手には、何やら手のひらサイズの小さな一枚の紙切れが握まっていた。見る、と「う」とらし。

私は「ど、どうも」と、なにやら情けない感謝の声をかけながら、その紙切れを見て

「……」

絶句した。

何も

何も言えなかつた。

これは一体何なのだろう。私の理解の範疇を一回りも超えている代物だつた。

と、そこで。

「あ、これ知つてます！ というか、私の友人さんが作つたものなんですよ！ すごいですよね。この、写真？ って言うらしいんですけど、独自に魔法を作つたってこの前楽しそうに話してたので、フェオさまの布教活動のため、手伝つてもらつたのです！」

なんだか自慢げに、縛つていなかつたら胸を張るポーズでもつていそうなイルマの声がした。

それがいけなかつた。

私の攻撃の矛先は、彼女に向けられることが決定された。

「な、な、なによこれはっ！ どういうこと！？」

「むっ！？ ふえ、フェオさま、赤いのが、赤いのが眼前に迫つて

おります！」のままではこの危険色の毒薬に着水してしまいました
ぐうつ！？」

イルマちゃん、トマトスープに顔を突っ込んでジタバタしていた。
いや、私が頭を押さえつけているからなのだが。

その写真もどき。

身体測定の時の、隅でブラウスを一生懸命引っ張りながら、ぎゅっと目を瞑つて直立している私の姿。カラー。アングル床から上向きにより、母親仮面チヨイスパンツまる見え。
「な・に・・が布教活動よ！　ただの盗撮じやないのよ！　どうやつて撮つたのよ！　なんでパンツ見えてるのよ！　なんで色つきなによつ！？」

「フエオさま！　まざいです！　これちょーまざいです！　リバースしそうです！」

イルマが皿に顔を突っ込みながら、真っ青な顔で叫んでいた。

「お嬢様。落ち着いて下さい。大丈夫ですよ、とても良い絵じやないです。こ、こんな愛くるしい顔出来たんですね」

「……どうして半笑いなのよ」

いつの間にか近寄つてきていたロゼは、口元を手で隠しながら、目が完全に笑つていた。

その時。

「あつははははは！　いやー、いい反応するねえ。やつぱ、あんた面白いなあ」

……男前さんが大爆笑していた。

笑つても様になるところに、なんだか怒る気も失せてくる。

「　え、えーと。これは、なんなの、かな？」

氣を取り直し、イルマちゃんの頭を押さえつけていた手をせりつ、と引つ込め、出来るだけ笑顔で尋ねてみた。

……今さらキャラ作つても、もうどうにもならない氣もするが……

笑顔の私の問いに、男前さんは、顔をぴくぴくと引きつらせなが

ら答えてくれた。

「いやあ、なんかこれが生徒の間で出回ってたんで、本人に知らせたらどうなるのかなーと。ただそれだけなんだけどね。ふくふく……」

「さ、さいですか……」

まだ笑いを堪えていた。

正直、いい加減にして欲しかった。

……つて、あれ?

「あのー。もしかして、ヒルダさん?」

「ん? あー、覚えててくれた? これは光榮だねえ」

男前さんは、クラスメイトのヒルダさんだつた。

ただ単に、クラスメイトの名前で、覚えていた名を言つてみただけだつたのだが、どうやら当たつてくれたらしい。

「……御知り合いですか? お嬢様の?」

「うん、クラスメイト。……なに、その在り得ない現象を目の当たりにしたような反応は」

隣でロゼが驚愕の面持ちを浮かべていた。

私も、だけど。

クラスメイト。

化け物クラス。私の魔法不能者つぶりを一番目に焼き付けた人達。あの最後のテスト、魔法制御の後、みんな呆然と私の方を見ていたと記憶している。

アナスタシアはその場で石化していた。それだけは気味がよかつた。

まあそれはともかく。

どうして私に、こんな普通に話しかけられるのだろう。

という疑問が表情に出ていたのか、ヒルダさんはまた笑い出しながら、話した。

「今年はあのシュラップネルとホワイトヘッドが、同世代で一緒に入ってくるっていうからさ。一体どんな怪物なのかと思つたら、こん

なキューーなはつちやけお嬢様だとは、びっくりしちやつたよ

「…………さあ、さあーと? はつちやけ?…………」

その理解不能な言葉は、なんだか頭が受付を拒否しているようだつた。

「 身体測定のこれといい、最初のテストでずつこけて転がるわ、持久走では1キロで足つって悲鳴あげるわ、極めつけの最後には、じゅ、呪文を覚えてないつて。ふつ、くくく」

「…………え」

なにこれ。

笑つちやうの?

そこ、笑つていいくところなの?

あれだけ、一人で色々ネガティブシンキングしまくったのに、笑つて終わらすの?

疑問は晴れることなく、笑い上戸は容赦なく続く
「も、もう一人の本当の怪物とは漫才繰り広げるわ、それ以上の怪物らしい赤髪の彼氏とはいつでもどこでもべたべたするわ、食堂ではわざわざ真ん中で騒ぎ起こすわ、ぱ、パンツだけはすごく見栄はつてるわ、入学式では挨拶サボるわ、あんた、もう、さ、最高だよね、ふふふふふ」

「…………」

負け犬

今。

ここで。

全存在を、否定された感。

もつ。

…………立ち直れないかもしれない…………

「あ、あのフエオさま。あたしが悪かったです。げ、元気出して
ください……」

「イルマ様、放つておきましょ。あの後ろ向きに大激走お嬢様は、
一度前傾姿勢を身を以て心得た方がいいのです」

なら黙つていて貰いたい。

食堂から走つて逃げかえつてきた、私の部屋。
枕に抱きついて現実逃避している私の傍で、この二人が私に慰め
風虐めをしてくるのだ。

「しかしお嬢様。よかつたのではないでしょ。少なくとも、あ
の人間はお嬢様のことを侮蔑したり、偏見や気に食わないなどと思
つてはいる風ではなかつたですが」

「……もーいいからほうつておいてよー……」

「……もーいいからほうつておいてよー……」

「……もーいいからほうつておいてよー……」

負け犬として。

元男として。

『パンツ見栄はつてる』

『イヴァとべつたり』

『キューートなはつちやけお嬢様』

『愛くるしい顔』

私の頭の中で、反芻はんすうされる呪いの言葉。

『ふえええええ……』

死にたい。

舌噛み切つて死のうかな。

そんなこと出来るくらいの度胸があつたら、今ここにいない。

「……落ち込んでいるフエオさまも、なかなかグッドです！ 夫と
してすごくそそられます！」

「そうですね。ざまーみやがれですね」

「あ・ん・た・ら・はああつ！」

一向に黙る気配のない一人に、いい加減我慢の限界で、私は枕を

投げ飛ばして絶叫していた。

「なによ！ なーにーよつ！ 私なんてビーセ、こつだつて後ろ向
きでネガティブ思考爆裂で、そのうちちつこじつこ石こつまずいて、後
頭部ぶつけてほっくりぱっくり死ぬのよー。こーじやない！ ざま
ーみひじやないのよ！」

ベッドの上でバタバタしながら、なんかもつ支離滅裂なことを口
走っていたりする。

……さすがに、そんな私を見かねてか、ロゼはこほん、ヒー
咳を吐いて、真面目な話題に切り替えるようだつた。

「まあ、そうですね。そもそも冗談はよしておいて、本題に移りま
しゅうか」

「…………本題？」

暴れすぎたせいで息を切らしながら、おひむ返しに聞き返す。そ
の間に答えたのはイルマだつた。

「はいです。さつき、フロオさまが逃げた後、色々聞いたんですけど

「

要約

どうやら、私の今日の醜態はほとんどの所で回り回りしているらしく
(写真付きで)、だがそれに関して、色々尾ひれがついていたらし
い。

曰く。

『シユラプネルは、ホワイトヘッドを舐めきつて、全力を出してい
ないのだ』

曰く。

『全力を出すと、ホワイトヘッドに負けてるのがバレるから、魔法
不能者などと見え透いた嘘をついているのだ』

曰く。

『化物扱いされるのが嫌だから、わざわざ茶田つ氣を取つて、皆に好かれたいんじやなかろつか』

曰く。

『赤髪の貴公子イヴァ・イルとはテキでいるので、諦めた方が良い』

「…………」

最後のは全力でスルーするのは当たり前として。

「なんで、本当のことが流れてないのよ…………」

完全無欠、嘘偽りないことを、全然信用されていなかつた。

もはや、がっくりと肩を落とすしかない。

「どーやらみんな、シュラップネル家の人が、魔法が使えないなんて、これっぽっちも思つてないようです」

恐ろしい先入観だつた。

初等学校のときは幼さ故か、あまりそういうのはなかつたので、これは完全に私の想像外である。

「…………とこなうか、思つたんだけど、ここつて一応世界最高峰の魔法学院よね。なんでこんなぐだらないゴシップが流行つてんの」

「それは、ほんの上位クラスの一握りだけです。規模が大きすぎる為、下の方は普通の学校となんら変わりはありませんし、試験すら違います。その為、有名人見たさに通う生徒など幾らでいるでしょう」

そう言つて、ロゼは横の人物を指さした。言つ。

「これが最たる例です」

「なるほど」

納得の例だつた。

「ロゼさんもフェオさまもひどいですよ…………」
なにやらぼやいてはいたが。

「まあ、ともかく」

あつさり無視して、ロゼ。

「ともかく、基本的な状況はそんなに変わらない、という事ですね」

「……そうね」

『どこか暗さを感じさせるロゼの声に、私は頷き返した。

「う。

結局のところ。

『魔法不能者のぐせに生意気に最上クラス、さらに偉そうなショラブネルの人間』から。

『実力を見せないくせに生意気に最上クラス、さらに偉そうなショラブネルの人間』に変わっただけなのだ。

「大変だね、専属守護隊長」

「……全く。私のメイド人生は、今、最大に危機を迎えてますよ。一体全体どうしてくれるんですか」

私の軽口に、思いつきり肩を落とすロゼだった。

(1-1) 疲れ氣味負け犬の学友達（前書き）

荒唐無稽をこつけいむとう、とずっと勘違いしておりました。
携帯、縦書きPDFの方で変換できないようなので、アクセントを削除いたしました。

(1-1) 疲れ気味負け犬の学友達

翌日の学校。登校3日目。

今日は教室でイヴァと合流した。道中や廊下では口ゼガびつちつマーク。

そして。

「教室とか授業では専属守護兵その一人、よひしへ」

「宜しくお願ひ致します、部下その一人」

「お前ら……」

その一人さんが半眼で呻いていたが、この世界は男卑女尊なので無視させて頂く。

と、なんか最近セクハラ過多で、精神的女の子化が著しい気もするが、全くをもって気のせいであろう。

そう思わないど、やつていけない。

いくら元から、女9・男1であつても、その男一割に色々な誇りが詰まってるのだ。

「……そういえば誇りって……なんかあつたつけ……」

よく考えると、負け犬根性ぐらいしか思いつかない。実はいらないのかも知れなかつた。

「はあ……」

なんとなく憂鬱になつて、ため息をつきながら私は自分の席に座る。幸いなことに、まだ白黒は来ていなかつた。昨日の石化状態のままゲームオーバーになつてくれているのかも知れない。

そんなことを妄想していると、前の座席に横向きで座つたその一人さんがニヤニヤしながら私の顔をみつめていた。

「きもい」

そして私の思いがけず出た感想に、一瞬凍る。後に顔をぴくぴくと引きつらせながら苦笑した。

「あ、あのなあ……まあともかく、元気が出てよかつたよ
保護者面していた。腹が立つた。言ひ。

「つやー」

再度停止した。そしてすぐに再起動。なかなかしづとい。

「お前、なんで一人きりになつた途端、そんなふつきりほつこ
なるんだよ……」

「二人きりとか言わないでよ。他にもクラスの人いるじゃない
数人ほどだが。

「…………お前、本当によく分からぬ奴だよな」

と、なにやらその一人さんが嘆息混じり、私に呆れていた。むかつ
いた。

「分からぬのはいつちよ。いつの間に他の女の手に手を出したの
よ

ん?

「じゃ、じゃなくて。いいから、必要以上に話しかけないでよ。誤
解されたくない つて、あー、もうー」

「お前、何一人で赤くなつたり青くなつたりしてるんだよ
間違えて某4文字熟語的な失言をしてしまつたからである、放つ
ておいて欲しい。

そうなのだ 実際にこの幼馴染が、色々手を出したりとか、そ
ういうわけでは無いのである。だからこそ余計に、腹立たしいこと
この上ないのだが。

主に元男として。

ガララッ と、その時、勢いよく横開きの扉が開かれた。

どうやら、石化では勝てなかつたようである。バジリスクさんも
案外使えなかつた。

「あら、フエオドール。今日も相変わらず、その太い寸胴を惜しげ
もなく披露して、恥ずかしくないのかしら
むしろ絶好調らしかつた。

そのまま、自分の椅子に優雅ぶりながら腰を掛けた。

「昨日　　わたしなりに、あなたのことを考えてみたけど」
お馴染みの表情で、アナ斯塔シアは私の方に視線を向けて。

「　　やっぱり、あなた、演技してるわね。間違いない。だって

」

……まだ勘違い継続中だった。よもやため息すら出ない。

私はこの馬鹿女と「ミニコ」ケートしたくなかったので、その一さんに中継を頼むことにする。

「その一さん。私が嘘を言つていないつてのを5歳児でも理解できるようひいて、この白黒に説明してよ」

「はあ！？　な、なんで俺が？　じ、自分でしりよ、それぐりー」

……なぜか、すぐ動搖していた。

なんだろう　　その時、私の脳裏に閃くものがあった。

『好きな女の子に話しかけられないダメ男が、友達に流れで話さないといけない風にされた時の、リアクション』

「イヴア……さすがに趣味悪いと思う……笑えない……」

「な、なんだよ！　今日、お前おかしいぞ……ってあれ？　いつもか？」

「……おかしいのはあんたでしょうが。確かに見た目は悪くないけど、中身は最悪じゃないのよ」

「誰のことを言つているか知らんが、心を映し出す等身大鏡でも持つてきてやろうか？」

「どうこう意味よ」

「　　あの、いい加減、理由を話をして貰つてもいいかしら……」

横を見やると、なんだか待ちぼうけ風のアナ斯塔シアが、ひとつ手を挙げていた。

「ほんっ、と咳払いして話し出す。

「低俗な噂が氾濫しているけど、わたしこの耳でしつかり聞いた

から。フェオドール、あなたが『特別』って言われたのを

指一本立てて、すぐ鼻が高そうに説明していたが

「……フェオ、何のことだ?」

「知んない」

何を言つてゐるのか。

しかし、今日の絶好調アナスタシアは、それだけでは挫けなかつた。うざつたく髪を払い除けながら言つ。

「惚けても無駄よ。あのマクミレン教師が言つてたもの。他には『特質』だの『異質』だとかも言つてたかしら?」

「……まくみらん?」

誰のことだらう。聞き覚えのない名前だ。

だが。

「おい、それ本当かよ!? 何で言わないんだ、お前は! あー、そうか、あの人なら分かるのかもしれないな……って、それ大丈夫なのかなよ……」

「……ふえ?」

イヴァには分かつたらしい。額に手を当てながら唸つていた。

これで理解できてないのは私だけ。前もこんなことがあった気がする。

まあそれはさておき。

「ねえ、マクミラン教師つて誰?」

思い切つて一人に尋ねてみると。

「は?』

同時に頓狂な声を上げられた。息ぴつたりだつた。

「お、お前な

「テオニエイラ・マクミレン』、学院長よー、入学式でも話して

たし、その後も呼び出されたでしょうが!」

それからすごい勢いで呆れられ、怒鳴られた。ミレンのところなんてめちゃくちゃ強調してくる。

「だつたら、初めから学院長つて言つてよ。名前なんて覚えてるは

「すないじゃないの」

と、私がややいじけながら言つと、ぴしつ と音が鳴りそうな
くらい、二人は硬直し

（…………ねえ、あなた。この子、本当に大丈夫なの？ 色々な意
味で）

（…………ああ、ちょっとな。世間ずれが激しいんだ。性格も歪ん
でるし）

なんだか仲良さそうに、お互い体を乗り出し、顔を近付けてひそ
ひそ話をしていた。全部聞こえてる上に、私に失礼極まりない内容。
「で！ その学院長先生がどうかしたの？」

聞こえていないふりをして私は促した。イラついていたので、語
調は強くなつてしまふが。

その声に、ようやつと二人は体を離して、説明し始める。

「マクミレンってのは、現在で一番力を持つている魔道士って言わ
れてて、子供から老人まで、知らない人は普通いない、ってほどの
人なんだよ」

「それだけじゃないわ。今回問題なのは、あの人の持つている特殊
な力のことよ。これも常識なんだけど」

「魔眼だの、賢者の瞳だの、色々言わてるんだが、つまりは魔力アーマ^{アーマ}
を視認できるらしい。本当かどうかは知らないがな」

ところどころトゲがあるような気がしたが、それは再度スルーし
た。

…………それでも、交互に話すこの二人。相性抜群なのかも知れ
なかつた。いや、別にどーでもいいけど。

「 魂が見れる、ね」

言われて納得する。確かにそれなら身に覚えがあることだった。

特殊。

異質。

特異。

魔法不能者　魂を持たない人外。

「いや、なんでそれで私が嘘をついてる証拠になるのよ。むしろ逆でしようが」

ちょっと納得しそうになつてから、せりきりで反論する。すると、白黒はいつもの表情よつよつと笑ひ。口裂け女みたいだった。

「あの人『特別』と言つたからには、あなたはやっぱり特別なよ。そしてそれを隠すために、わざわざあんな手の込んだ芝居をしてくるのよー！」

ビシッ！　と指を差されて断定された。もう、何を言つても聞かなそうである。

「もう勝手に言つてなさいよ……」

私はあつたり匙を投げるが、難攻不落の莫迦女は、留まるじとを知らない。指を差したまま口上は続く。

「何と言われようと、わたしはあんたに本氣を出させるつもつよ。まずは手始めに、毎日身体測定の結果を口づさみながら登校してやるわ！」

地味な嫌がらせだった。

「その次は、そうね」

他にも色々言つていたが、あまりの荒唐無稽さに、そこから先は手で耳栓をして聞き流すこととした。

「ふええええ……」

呻き声が、お毎時のがやがやといつるとい教室内に、それほど響かずには沈み落していく。

私は自分の机に体を預けてぐつたりとしていた。

その周りで。

「あつはははは！ 今日は2キロでリタイアか！ いやいや、相変わらず面白いなあ」

「ヒルダっち、笑い過ぎだよ。フェオたん、魔法も使わずに疲れるんだからさ」

なぜか、クラスメイトが空き椅子に座りながら談笑していた。一人は、昨日私を辱めていった、男前笑い上戸、ヒルダさん。もう一人は、そのヒルダさんと同じ中等から来たらしい、リアナさん。

「……なに、この状況……」

普通にお友達、なのだろうか。よく分からない。策略謀略は一体どこに消えたのか。フレンドリーに振る舞つて、後で食べるつもりなのか。ってかそもそも友達ってなんなのだろう。どこまでいったら、なにしたら友達と呼んでいいのだろうか。

……最後のは、なにやら怪しい雰囲気に聞こえなくもないので、取り消しておく。

「なに呟いてんの、フェオたん？」

リアナさんが、私の頭元で尋ねてくる。

「……そのフェオたんつての、やめてくれないかな……」

私は力なく体を起こしながら、懇願する。

だが、リアナさんは不満そうに口を尖らせていた。

「えー。フェオたんいいじゃん。かわいいじゃん。ぴつたりじゃん」

どうやら、やめる気は更々ないらしい。

このリアナという人物は、なんというか、ごく平凡の子、みたいな感じである。

これまでの、どの登場人物よりも常識味に溢れていて、社会性がありそうで、普通感が漂つていて。

「だから、一番苦手だつた。

「フェオ。大丈夫か？ 飲み物でも持ってきてやるうか？」

そのいつものフレーズと共に、私の背中をさすってきたのは、言うまでもなくその一人さんである。且つきが悪い不幸面に、心配さを滲ませていた。

だがしかし、その心配は、今はすこし遠慮して欲しいといふだつたのだが、そんなことをこの生真面目野郎に言つてもどうもならないことは、もう理解しきつていた。

案の定、2人がにひひつ、と人の悪い笑みを浮かべる。

「おやおや、いつもながら見せつけるねえ。持久走の時も初めから終わりまでべつとりしてたし」

「フェオたん、いい彼氏がいて羨ましいのう」

その2人の安っすい挑発に食らいつくイヴァ。

「か、彼氏！？ べつとり！？ いや、そうじゃなくて 、つて

……

そこでどうしてか私の顔色を窺う。こうこう時に限つて私に気を遣うといつ、ダメ男ぶり。

「……それ、本当に違うから。こいつはただの幼馴染で、ホントなんでもないから」

むつりダメ男を代弁してから、私はふらふらと立ち上がつた。疲れているときに無駄なエネルギーは消耗したくない。引き

こもり負け犬は、この化物共と違つて纖細なのだ。

「ん？ どこに行くんだ、フェオ」

「ちょっとトイレ

「そうか」

適当に嘘をついて、教室から 3人から離れよつとして

「 どうしてついてくるのよ

振り向くと、イヴァを先頭に、至極当たり前と言わんばかりに、私の後ろに付き添つていた。

どうしてか全員びっくりした顔で弁解する。

「いやだつて 嫌だけど一応部下^{まくわ}だし」

「おもしろそうだと思つたんでつー」

「フェオたんのトイレシーンを」

三者三様、一人以外、よく分からぬ理由で付き纏^{まとい}われていた。
……なんだか無性に腹が立つてへる。じこひら、どうあつても私
を休ませない氣らしい。

ならば。

「あ、外にマクミレン学院長が飛んでるー。」

「……は？ 何言つ 」

「え、まじで！？ どこーー？」

「フラッシュコチャンス！」

秘儀『あ、UFO』作戦はアホらしいことに成功した。
私はその隙に教室を飛び出し、廊下を走り逃げていった

(1-2) 絶体絶命負け犬の救世主

「ふへー……」

ようやく辿り着いたのは屋上。違う棟なのでそう簡単には見つからないだろう。

手すりなどはなく、ただ単に出れるだけといった風だ。私はちょっとした端の段差にもたれて、またしてもぐつたりと体を投げ出していた。

授業、一日目。午前の部。
実のところ、私はかなり参っていた。

肉体的にも 精神的にも。

……本当に飛んでくる『手が滑った灼熱玉!』
ファイヤ・ボール

他にも『足が滑った白電撃!^{ラグート・ボルト}』や『見間違えた蒼冥光弾!^{ブリアント・デルタ}』など、
果てには『なんとなく火灼靈!^{イル・スタック}』まで飛んでくる始末。

それだけではない。

先程のような『赤髪の貴公子、イヴァ・イル?キヨートなはぢやめぢやお嬢様、フェオドール・シュラップネル』攻撃が、私に決定的なダメージを与えてくるのだ。

他にも、アナ斯塔シアは家同士の決着をつけるためかどうか知らないが、今日一日だけで私の全肉体のサイズを4周ぐらい口ずさんでくる。地味に蓄積する鬱陶しさである。

「もう、死ぬう……」

力なく悲鳴を上げてみても、それらは何も解決しない。

つまりここは、一体何が起きているのかを詳しく説明しよう。

まず主に下の方のクラスから『シュラップネル腹立つ、力暴いてやろう大作戦』を受けていたのだった。

ランニング中に鉢合わせた、はたまた魔法訓練に同じ場所を使つ

ていた。

とにかく至る所で攻撃を仕掛けられる。

さらに性質たちが悪いことに、この世界の一般的に化物と言われる人間達は、灼熱玉ファイヤ・ボールなどをぶつけても、蚊に刺されたぐらいにしか効かないようだ。

向こうからしたら、たまたま落ちていた石をこちらに蹴つ飛びました、ぐらいにしか感じていらないらしく、報復も考えずぽんぽんぽんと悪戯気分。

その石ころに心底ビビりながら、ぜえはあと息を切らしている私にくつ付いて部下その1さんが大活躍。

飛んでくる火球を拳で殴り潰し、撃つてくる青い光弾を体で受け止め、突如現れた大量の火の粉を突風で術者ごと吹き飛ばす。
……平然とした顔で『フェオ、大丈夫か?』などと声をかけてきながら。

そして始まる、クラスメイトの虐め。

奴らは、私が魔法を使えないように見せるためのカモフラージュとして、イヴァに守つて貰つてているのだと勘違いしてやまない。

完全に『化物扱いされるのが嫌だからわざわざ茶目くわざつ氣を取つて、皆に好かれたいんじやなからうか』案が、教室内では採用されるらしく、ヒルダを始め全員が第三者として楽しんでいやがつた。上方のクラスは、あくまで『自らの家の軍事力を顯示し合つ』が最優先のようで、直接ちよっかいを仕掛けてくることはなかつたが。

それだけは良しとするべきなのだが……なんだろ?、素直に喜べない。

ちなみに唯一の助け人口ゼット守護隊長は、先程逃走しながら探してみたものの見つからなかつた。

いざという時の可愛らしいメイドさんは、本日は非番のようだつた。寮にでも戻っているのだろうか。

「ロゼの裏切りものおお……」

腹いせに私が逆恨みの声を上げたその時である。

「おー。こんなところで何してんだよ、お前は」

「にやいつー?」

いきなりの声に反射的に体を跳ね起きると、二つの間にかそこに怒気を撒き散らすイヴアの顔。

屋上への扉が開かれた気配は皆無だったのだが。

「外から登ってきたんだよ。いきなり居なくなるから

疑問が顔に出ていたのか、説明するイヴア。言いながら私の体を

またいで詰め寄つてくる。

「な、なによ」

思わず動搖しながら後ろすさりうつするが、すぐ後ろは崖っぷちのため逃げられない。

と、そういうじている内に私の鼻の先まで、ずいっ と彼の顔が近付けられ。

「ち、近い……」

お互い息がかかる距離まで寄せてくる。

この顔をすぐ近付けてくるのは彼の癖で、本気で怒っている時は、なぜかこうしてくることが記憶に残っていた。

「……分かってんのか。今俺がここに来るまでに、もしかしたらお前殺されてたかも知れないんだぞ」

耳元で、凄みを効かせたような声で言つ。

顔を逸らそうとしたが、顎に手が添えられていてそれすらも許してくれない。

「う、ごめん……なさい……」

私は柄にもなく普通に謝つていた。

確かに今回の件で私に弁解できる要素は無く、危険を冒していたことも百も承知である。彼が怒るのも無理はない。

だが、いつもの私なら反論しただろう。それをしなかったのは謝るんだつたらどうして俺から離れたんだ。お前だって死にたく

ないんだろ」

反論しても、この説教モードに入っちゃったイヴアには通用しないからである。

5年ぶりに再会して初めてのマジギレ。いつなつたら刃向わずに謝るのが良策なのだ。

「うん……『めん……ごめんね……』

普段ひねくれている子が、いつ落ち込んだ風に振る舞う破壊力は抜群である。

ポイントは、俯き加減で視線を上目遣いにすること。涙目にするとなお良し。

つて、私づくづく性格悪いな……

負け犬、性根の悪さは天下一品。

しばらくして、イヴアは「あ……」と深くため息をついてから、「もういい。これからは黙つて居なくなつたりするなよ」と言つて、ようやく私から顔を離して立ち上がつてくれた。……ちよつぴり怖かつたので、顔が赤くなつている氣もするが、一応これで負け犬ミッションは成功である。

と思つた矢先のことだった。

「ベリルにも、お前を守るよう頼まれてるんだ。何かあつたらあいつに顔出しきれない」

「…………え」

彼の不意に放つた一言が、私の動きをピタリと止めた。

一瞬でその言葉が頭を突き抜けていつて。

ようやく認識する。

ベリル。

妹。

なぜかそこで出でてきたのは妹の名前だった。

お母様でも、お父様でもなく。

私の妹。

別にそれだけのことなのだが。

「　　ベリルが、私を？　あの妹様が、私に情けをかけてくれたつてわけ？」

私は聞き流すことが出来なかつた。

未だ地面に横たわつたまま、馬鹿みたいに食いついてしまつた。
「情けつて……そんな言い方するなよ。あいつだつて、お前を心配してるんだぞ」

「心、配？　なにそれ。憐れみの間違いでしょ」

「…………？　おい、フエオ。どうしたんだよいきなり　　」

「さすが、完全無敵最強妹はやることが違うわよね。こんな欠陥人外最弱姉に情けを与えるなんて、本当にいい人間してる。大した大物よね。いつだつて、どこだつて、なんだつて、私に迷惑を掛けられてるのに、まだそんな余裕があるんだ。だつたらそのまま跡継ぎだつ」

「フエオ！」

張り上げられた彼の声には、だが怒りは無かつた。

……青ざめていた。

自分の失態に気付いたような、そんな顔をしていた。別に彼は何も悪くないのに。

悪いのは私だ。それ以外の誰でもない。
そんなこと自分でも分かつてゐる。
分かり切つてゐる。
けど。

「　　あんただつて、そつなんでしょ？」

「最低な、ハつ当たり。

その言葉に。

「…………」

どこまでも生真面目で、優しくて、いつだつて気遣つてくれる幼

馴染は、返事することが出来なかつた。

私の幼馴染は、私と違つて嘘などつけない真人間だから。
そんなこと昔から知つてゐる。

……知り尽くしてゐるのに。

「もう放つておいて」

ショックなど受ける権利すらないのに 私は起き上がり、駆け
だしていた。

力いっぱい貧弱な身体で扉を蹴り飛ばし、その場から逃げ出した。

負け犬、脱走。

開き直ると決めて、一日にして逃走。

イヴアから、ロゼから、イルマから 他の全てのことから。
目標の一週間。

最初はそれだけ耐えれば、この学校が追い出してくれるものだと
思つていた。精々、恥を晒して、恥をかかして屋敷に戻つてやろう
と思つていた。

だけどあの工口学院長のせいだ、それは無理だということが判明
してからは、取りあえず彼らに縋つて自分らしく一週間ぐらいは生
き延びてやろうと目論んでいたのだが。

「馬鹿みたい、私」

そんなこと全て分かつていて、縋るつとしたのではなかつたのか。
イヴアは憐みと頼まれて、ロゼはメイドとしてのただの義務。イ
ルマは 私のなにが気に入ったのだろう。

「……見た目？」

それぐらいしか思い浮かばない。

実はポケットに昨日の写真を忍ばせているのは秘密である。

没収した後、捨てようとして捨てられなかつたのだ。

「……写真観賞なら、ギリギリセーフよね」

誰に対する言いわけなのか、私は呟きながら空を見た。

真つ黒だと思っていた夜空は、輝かしい星のせいであの若干の青さを
帯びている。

奇妙な類似点で、あの世界と同じ星座っぽいのがあつたりする。

午後の授業をサボつて、誰にも見つからないように色々な校舎の
影だとかに身を潜めて、現在は夕食時。
寮にも帰らずに、帰れず、私は夜の学院敷地内をうろついて
ぶらついているのだ。

敷地内。踏むと案外弾力がある芝生。石が敷き詰められた道に、
沿うようにして魔法の光が照らしている。

この魔法の光は、それ専用の職人さんがいるらしく、光の質や同
時点灯数などで職人の価値などが決まるらしい。

このよつた魔法技能職は他にも色々あり、水道を管理する風水士

……ぐらいしか知らなかつた。

「私には無関係だしね」

興味が無いことを、覚えていられる人間などいない。

「いや、私、人外だし」

言い直そう。

興味が無いことを、覚えていられる生物などいない。

……ちょっと言い切つていいのか微妙になつてきた。といつが、
そもそも魂がないから生物ですらなかつたりするのか。

などと、とりとめのないことを考えていると、やはり疲れている
のか、足がぶらついて

「いにやつ」

芝生の上に顔面からずつこけてしまつ。この芝生、なんか硬くて
尖つていて。

「つていだだだつ！？」

刺さつた。頬。刺さりまくつた。

それからいつものように、痛み忘却殺法に移りつつとして（転がつたらまた刺さる…）

思い留まつて、その場でくねくねとがき苦しんだ。……傍から見たらすごく変な人だと思われること間違いなしである。

「ふえええ…」

なんとか収まつてから仰向きで大の字になる。背中がチクチクしたが立ち上がるのがしんどかつたのだ。

負け犬、色々と^{おんじつ}満身創痍。

……まだあの屋敷から連れ出されて3日目の晩。

もうHPは一桁にまで削り取られていた。最初から一桁ぐらいしかないだろお前というツッコミはNGである。

今、モンスターに遭遇したら逃走コマンドも使えそうにない。逃走コマンドを使おうとも思わない。私のSP精神的ポイントは酷いダメージを受けていた。

「……一人で勝手に酷いこと言つて、一人で勝手にダメージつて…」

部下その1さんもいい迷惑に違いない。

あの、むつり生真面目野郎のことである、ビーセ気に病んでいるに違いない。馬鹿だから。

……それ以上に病んでいる私はもつと馬鹿だということか。うるさい、放つておいて欲しい。

などなど、先程から後ろ向き脳内発言でびっしりである。

登場人物が私一人だと、ここまでネガティブスパイラルに陥るのだ。

一度イルマの脳内でも覗いた方が良いのかも知れない。偏見だが、あのレズビアン気味小動物の頭は、ピンクいこと口口ちつくなことで埋め尽くされていることだろう。

「レズ……」

私、人のこと言えるのだろうか。正直男に、言葉にすることもは
ばかれることをされたいとは、爪の垢ほども米粒ほども思わない。
『ぐぐく当たり前である。

ならばつまり、私は一生純潔とこりう」とで、前の人生はどうだつ
たかなんて、聞くほど野暮な奴はあるまい。

ようするに。

「童貞処女で死ぬの、私……」

なんだかすこく虚無感に襲われる。 というか魂の無い私は果
たして妊娠とかしたりするのだろうか。
……いや、あまり考えたくない。一応元男にはきつつい話題な
である。

その時。

ぐううう……。

腹の虫が、生命の継続を求めてきた。

「…………」

一瞬、考えて。

「帰ろ」

決断は案外早かつた。

満身創痍の体をよつしりせ、とおばちゃんみたいな掛け声と共に
起こううとして。

それにぶつかつた。

「…………ふえ？」

最初に思ったことは、つちの『ゴージャスベッド並のフカフカ度合。
次に思ったことは、何か暗いなー、ということ。

その次に思ったことは、なんでの『ゴージャスベッド、暖かくて
生きてるみたいに動いてるんだろうと

「…………エンカウント…………たん？」

なぜ『さん』付なのかは私も分からない。

とりあえず状況を確認しようと、頭上を見上げてみた。

なにやら、不自然に明るい夜空が切り取られていた。その切り取り線を辿つてみると、

猫のよつな、トマのよつな、某四角錐の墓を守つてゐるアレのよつな。

結論。

大きく息を吸い込んだ。――3日で一番大きな声を出す必要を感じたからである。

そして。

「いやああああっ！？ 化け物おおおおっ！？」
絶叫しながら背後に向かつて全力でほふく前進。手が痛かつたが、そんなことを気にしている場合ではない。

一通りほふく前進をした後、なんとか立ち上がりよれよれと走り出す。まっすぐ走れていかは分からぬが、とにかく必死である。

つい先程、自分で逃走コマンドを選ばないとかどうだとか、そんなことを言つていたような気もするが、断じて氣のせいである。いくつかの道をまたぎ、いくつかの光に照らされ、いくつかの建物を見かけたところで、

その建物の影に入ると角を曲がつた、刹那。

ふわり と。

体が浮く。

「え

足を引っ掛けられたのだと氣づいた時には、もう地面に倒れこんでいた。

「つ！？」

痛みに対する反応よりも先に、生命の危機を感じたのか、私はすぐには辺りを確認して、

すぐにその原因を見つける。

3人。制服。男。顔は暗くて分からぬ。だけど、なぜか表情は

見えた。

……笑っている。私を見て、笑っている。

「おいおいおいおい、本当に魔法を使えねえのかよ、こいつ」

「だからそういう言つただろうが。信用してなかつたのかよ」

「信じてなかつたわけじゃねえけどな。つてか、だつたら第一こんなことしねえよ」

なことしねえよ

笑つっていた。

逃げ、なきや。

これは、このパターンは、まずい。

「へへへ、そつだよな。 つておつと。逃げられないぜ、シュラ

プネルさんよお」

「つー?」

掴まれた。どこを掴まれたのかも分からぬ。

振り払おうとしても、びくともしない。

「……これじゃ完全に悪モソンじゃねえか俺達。見てみろよ、すっげえ嫌がつてゐぞ?」

「そりゃそつだらう。ここで嫌がらなかつたら、逆に引くだら嫌。

怖い。

さつきの化け物なんかより、この化物ヒンゲ達の方が怖い。

恐怖で声が出せない。

助けを呼ばなければならぬのに。

……誰に?

「それにしても、やつぱ美人だよなあ。さすがシュラ・プネル」

「関係ないだろ」

「いやいや、ホワイトヘッドだつて美人じゃねえか。なんかあるんじゃね?」

「まあ美人つてことは認めてやつても構わないが、可愛げは無いな。主に性格が」

誰も いない?

イヴァも、ロゼも、イルマも。逃げた。私が自分から逃げた。ヒルダさん、リアナさん アナスタシア。誰に助けを求めるつもりなの？ あいつらは私の天敵じゃないのか。

「だけど俺の大事な幼馴染なんだ」

幼馴染？

「……はい、幼馴染です」

会話してどうする。

逃げなければ。

一刻も早くここから逃げなければ。

いつの間にか掴まれていた手が離れていた。

足はすくんで動かないからまた手で這っていく。これで逃げ切れるとは思わない。でも逃げなきゃ

「おい、フェオ」

逃げ切れなかつたら今度こそ舌を噛み切つて死んでやる。こんな薄汚い奴らにやられてたまるか。

「……なにやつてんのお前」

「嫌つ！ 離してつ！ 離してよ！」

なぜか声が出た。でもこんな物陰で助けなど来るはずもない。とにかく逃げるしかない。

と。

ペたつ と指先が何かに触れた。

地面からなんか出つ張つてているような置いてあるような横たわっているような、生暖かい人肌みたいな障害物。

……人肌？

横たわる人。横たわり人。寝ている人。寝転び人。死んでる

人。死人。……死体？

「いやああああつ！？」

「やかましい」

ポカつ！ となにか軽い音がするような、でも決定的な打撃が
後頭部に当たられて。

私の意識はそこで途切れた。

(1-2) 絶体絶命負け犬の救世主（後書き）

最初から設定や展開を考えすぎたせいか、逆に次の展開やらなんやらが難しくなつてしましました。

さらにシリアルスがどうやら下手糞だったようで、ロメディー展開じやないと書けないとこつ悪循環。どうしましょうこれ。

(13) 追い詰められた負け犬の決断

「……おはよ」

誰もいなかつたが、なんとなく挨拶をしてみる。

起きたのは自室のベッド。着ているのはパジャマで、制服は横にきれいに畳んで置かれていたり、ハンガーに掛けられたりしていた。芝の付着や泥汚れなどは一つも見られない。

「魔法……か」

屋敷のメイド達が常日頃から、洗濯が大変だと愚痴をこぼしていたことを、思い出していた時だった。

「おはよ、フェオドール」

先程の挨拶に返事するように聞こえたのは、声だけでも表情が窺い知れるよつな、無駄な自信に溢れているよつなもの。声の方を見やつて、私は尋ねた。

「……なんであんたがいるのよ」

そこには絶好調の笑みを浮かべた、アナスタシアが制服姿で直立していた。こちらはまだベッドから体を起こしただけの体勢のため、見下ろされている感が腹立たしい。

「ちなみに今は昼休みよ。おはよつと言つのは的確じやないわね」

「だからなんであんたがいるのよ」

「鍵が付いていないもの。簡単に入れるわよ」

そういうえばそうだつたか。というかそれ、寝ているときに寝首とられ放題ではないのか。随分と危険を冒していたものである

「……昼休み？」

はつ、と氣付く。なるほど、イルマがいないのはそういうわけだったのか。そしてこいつがここに来たのも昼休み中だからというわけである。と、一つ一つ疑問が解消していく。

「イヴア・イルが死にそうな顔をしていたわよ。あなたも昨日からダウン中で、あの俗物共が変な憶測を乱立していたわ

「俗物？ ああ、クラスのことね。まあ他人事ほど楽しいものはないんじゃないの」

「そうちから。わたしはくだらないと思うけど。あんなもの、誇りを持たない人間の馬鹿な遊びよ。ゴシップを立てる暇があるのなら、呪文の一つでも覚えていればいいのに」

「……あんただって、私のゴシップに拍車をかけた一人なんだからね」

「はい？ なんのことかしら」

全く無自覚だった。私が力隠してる説は、この白黒が煽った部分がかなりあるのだが。 てかそもそも、なんでこんな普通に会話が成立しているのであらう。自然すぎて何かが不自然だ。

「……そりいえば、なんであんた、ここに来たのよ」

気付いて、ため息交じりにそう言つと、彼女は一瞬びくりと動いた。いかにも忘れてました、的なリアクションである。

「これよ。読みなさい」

即座にポケットから出した二つ折りの紙切れを投げつけてくる。特に指示に逆らう必要性も感じなかつたので、ごく普通に開いてみる。

「…………ふーん。なるほど、ね」

そこに書かれていたものは、挑戦状と脅迫状。

十三条。

五年前。

一つの言語が、紙いっぱいに大きく書かれている。自信満々な字だつた。

「あなたのこと、勝手に調べさせてもらつたわ」
聞いてもないのに、喋り出すアナスタシア。

「誕生日は四月一日。歳は十五。出身はここ、イングヴェルグ。初等は少し離れた辺境にある。分かったのは場所だけ。学校名、過去に在籍していた生徒、教師、それらは何も分からぬ。どう考えて

も隠しているわね。それも厳重に。それでもしらみ潰しに調べて、出てきたものはその言葉よ」

私の手に握られた紙に指を差す。この指差すのは癖らしかった。彼女の口上はまだ続く。

「『五年前』。それ以外に何が分かつてゐるのかを教える気はないわ。とにかくそれ以降、あなたは郊外の屋敷に隠遁していたらしいわね。表に出ていたのは、全く同じ顔をした妹だけ。正直名前を聞いたときは驚いたわ。本当に瓜二つのね」

「……そうね。別に双子じゃないのに、嫌味なほど。おかげで比べられて困つてゐるのよ」

「嫌いなの？ 妹のことが」

「嫌う権利すらないわよ。負け犬には」

やはり私は、妹の話題には食いついてしまつりし。翁等感もここまで来ると大したものである。

ともかく。

「よく調べたわね。大したもんだわ」

普通に称賛する。だがこの女のことだ、これが私の『特別』である根拠とでも思つてゐるのだろうが、話は単純、私の魔法不能者つぶりを隠そうとした親の工作に違いない。

五年前というのは、私がどうどう嫌になつて、引きこもつ宣言をした年号である。

「じ、事実は小説より奇なり……」

「な 何笑つてゐるよ！」

思わず腹を抱えて笑つてしまつた。

「とにかく！ こつちはあなたの秘密も握つてゐるよ！ 観念して、決闘を受けなさい！」

また指を差して、声を荒げるアナスタシア。笑つたのが氣に食わないらしい。まあタイミング的に『それだけ？ プツプー、あほらしー』と取られなくもないが、うん、實際思つてゐるけど。

「け、決闘つて、この『十三條』つてやつよね？」

「そうよ！ 分かつてるのだつたら笑うのを止めなさい、フェオドール！ わたしは真剣なのよ！」

未だ笑いが止まらない私に、顔を真っ赤にして怒っていた。

十三条。コンスタンティア魔道学院、学則十三条。わざわざ十三を使つているところなどが、いやらしい。

それは決闘である。基本的に法律でも学則でも、人に向かつて攻撃魔法を使用してはいけません、といつ根底をひっくり返す、決闘という名の観客動員私闘である。

学校側に申請をして、時間設定から場所設定、くに結界まで張つて、怪我人まで見てくれる出血大サービス。『自分の家の力を誇示する』という目的に於いて、これほど配慮してくれた制度はなかろう。聞くところによると、毎年五十件ぐらい申請されるらしい。

全く、見てる分には楽しいだろう。他人事の喧嘩ほど楽しいものはない。私だつたら野次を飛ばすこと大請け合いである。

なら当事者なら？

決まつてゐる。

死。

「受けるわ。その代わり条件を出してもいい？」

その言葉に、一瞬両手を挙げて喜ぶ素振りを見せようとして思い留まつて冷静を装つていた。こいつ、案外かわいい奴なのかも知れない。

「ほん、と咳払いして言う。

「ば、場合によるわね。言つてみなさい」

「……あんたの目的は、私の実力を知りたいってことなんでしょう？ なら、先手は私からつてことだ」

「先手？ どういう意味？」

首を傾げる彼女。私はぴつ、と指一本立てて説明する。

「私が、初めに全力で魔法をぶつ放してやるわよ。それを無事受け止めたらあんたの勝ち。防御を突き抜けてあんたをぶちのめしたら私の勝ち」

じつすればより分かりやすく、観客に私が魔法不能者だと信じて貰えるだろう。何をする暇なく、吹っ飛ばされるのは呆気ない。

「……それでもいいけど、決闘は片方が戦闘不能だと教師に判断されるまで終わらないわよ」

怪訝そうな顔をする。だが、それは簡単な話だ。

「簡単よ。あんたが防ぎ切つたなら、好きなだけ私に反撃してきなさいな。ファイヤ・ボール 灼熱玉でも、あの氷零炎爆槍ゼル・ブレイズ とかでも、何でも」

「好きな、だけ？」 それは防御魔法も使わないということから。言つとくけど死ぬほど痛いわよ」

死。

死ぬ。

どうせ死ぬなら、イヴアやロゼやイルマに、縋つて縋つて、昨日みたいに惨めに死ぬよりも。

「……望むところよ」

ド派手に、後腐れなく死んでやるわ。且立ちたがり、シュラプナル家の一員として。

完全に予想していたことだが、放課後、窓から不法侵入してきた説教モードイヴアさんが、私の寝床の傍らで仁王立ちしていた。

「お前！ 決闘って、一体どういうことだ！」

ブチギレ。昨日のしょんぼりイヴアさんは何処へや。正直怖いです。男の人の怒鳴り声怖いです。泣きそうです。

「だ、だつて、昨日の襲われたのだって、あの噂のせいだし、それを解消するには打つてつけじゃないのよ」

ちよつと言い訳としては苦しい。よく考えてみると、理由になつてもいなかつた。

「噂？ お前が力を隠してるってやつか？」 昨日まだつ考えて

も、お前が魔法を使えない前提で狙われてただろうが！　忘れたのか！？」

より一層、声を張り上げる彼。

……まことにおっしゃる通りです。でも素直に決闘を引き受けた理由を説明してどうなるというのだ。下手したら提出した許可願を、夜間学校に忍び込んで破り捨てに行きそうな雰囲気である。

説明しなくて、この幼馴染コンプレックスの男ならやりそ
うではあった。　ああ、ここでの幼馴染というのは妹の方である。

「昨日のことは謝る！　本当にすまなかつた！　でも、だからって腹いせにこんなことしなくてもいいだろ！？」

「……腹いせ？」

そうか、これは腹いせだったのか。確かにそうかも知れない。案外私つて、根に持つ奴なんだとしみじみ自覚してしまつ。

とにかくにも、許可願を破られないために、どうこの男を丸め込もうと思っていたその時、意外なところから助け舟が飛んできた。

「イヴァ様。大丈夫です」

ロゼ、だつた。メイドとして、義務でついて来てくれる、私の専属守護隊長。

彼女の淡々とした口調に、イヴァが意表を突かれたように、がばつと振り返る。

「大丈夫です、イヴァ様。そのひねくれお嬢様のことです。何か矮小卑劣な考えでもあるに決まっています」

変わらず淡々と、失礼なことを混ぜつつ援護射撃。ここからでは玄関の方に体を向けたイヴァの顔は見えないが、恐らく呆気にとら
れていること間違いないしである。

「大丈夫……つて、本当にそう思つてゐるのか？　ロゼ、こいつは魔
法不能者だぞ？　なにかあつたら怪我じや済まないんだぞ？」

「分かっています。その上で、大丈夫だと言つてゐるのです。その前向きに後ろ歩きお嬢様は、常日頃からやる気なんて皆無ですが、

やると言つたらやります」

「だ、だが……」

まるで根拠のない弁解だったが、なぜか丸め込まれるイヴア。そして、最後の一押しに残つてゐるもう一人。

「イヴアさん。ロゼさんはずっと学校に来る前から、フェオさまと一緒に暮らしてたんですね。なら、今回は昔の幼馴染さんより、現在の付き人さんの方が、正しいと思います」

私のベッドの足側に、備え付きの椅子を引っ張ってきて、ちょっと座つているイルマである。なぜか椅子の上で正座して、発言しながらガツツポーズなどをしていた。相変わらず変な子である。

「ですよね、フェオさま？」

「ええ！？」

「え、ええ……」

いきなり振られて、思わず驚いてしまつた。だがそれが決定的になつたらしく、イヴアは俯いて黙り込んでしまつた。理解はできないが、納得した、という感じなのだろうか。

と、その時パチンっ！と両手を叩き合わせる音が鳴つたかと思えば、イルマが私のところに飛びついてくる。

「わわわっ！？」

「い、イルマちゃん！？」

私、情けなく大驚き。だが、彼女は構わずに私の足を持ち、ベッドから引きずり出していた。

「そうと決まれば、今からフェオさまはお風呂タイムです！服は替えたものの、昨日から一度もお体を清めてないので、汗とかびつしょりなのです！」

なんだか不吉さを感じさせるセリフなどを言つていた。なんとかなく彼女の目的が把握できたので、必死に抵抗するが。

「い、いや分かったから。ひ、一人で入るわよ。入るから離して！..」

懇願しながら抵抗してみたものの、なぜか手が外れない。

魔法！？」

「むふふ……」

イルマちゃん。最低な笑みを浮かべていた。

本氣だ。」いつ、本氣だ。

「いにやああつ！ イヴア！ ロゼ！ 助けてええつ！」

足を引っ張られ、床を引きずられながら助けを呼ぶ。だが。

「……そ、それじゃあ、俺、寮に戻るから……」

顔をなぜか赤らめてイヴア。この野郎、なんかピンクい妄想してやがる。

「私も自室に戻ります。勝手に乳繰り合ひて下せませ。感想は後でじつくり聞きます」

いつもの鉄仮面のまま、がちゃりとドアノブを捻るロゼ。完全に見捨てていやがった。

そして。

バタンっ と扉が閉まる音。ばさり とカーテンが一際揺れる音がして。

「むふふふ……フ・オ・さ・ま・あ……一緒に体洗いっこしましょうねえ

食べる側と食べられる側だけが、部屋に残されて。

「いやあああつー？」

またしても、絶叫は誰にも届かなかつた。

(14) 爆発する負け犬の本音（前書き）

セーフです。
章を削除いたしました。

(14) 爆発する負け犬の本音

なんとか、お互にタオルで身体を隠す」とを了承して貰つたもの。

「ふへへへ……」

名田は背中流し。背中を指先で触つてくる。触り方が、完全にセクハラだった。

「ふえ……」

タオルがズレ落ちないよう支えながら、田をぎゅっと握り、必死に耐えていた。元男の精神的に、現女の貞操的に、大きな山場を迎えているのである。

魔法が使えないことを、これほど恨めしく思つた瞬間は無い。もしかしたらイルマちゃん、これまで私の関節技を無抵抗で受け続けたのは 止そう。考えたくもない。

「フヨオさま、気持ちいですか?」

背中越しから、もはや口ちつく発言にしか聞こえない。

「……も、もういいんじやないのかな……んつ……」

刺激して事に及ばないよう、遠回しに抵抗の意思を示すが、一向に彼女の手が止まることはなかった。

「……あうう……」

そのうち、なんだか頭がぼんやりしてくる。風呂場の熱気と、極度の興奮でのぼせていた。瞼の裏しか見えないのに、真つ暗な視界が回転していくような錯覚を覚え始めた頃、イルマが唐突に言った。

「泣いてました」

「……ふえ?……」

一瞬遅れて反応するものの、何のことを言われたのか、ちつとも分らなかつた。

だがこちらの理解を待つもつはないらしい、彼女は続けた。

「ロゼちゃん。昨日も。今さっきも。すげく悲しそうに、泣いてました」

「ロ、ゼ？ 泣いてたって、ロゼが？」

思わず、目を開けてしまう。なんで開ける必要があったのか、私にも分からぬ。

「……昨日、フェオさまがイヴアさんに抱えられて帰つて来たとき、ロゼさんがどれだけ泣いたと思います？」

「イルマ……？」

いつの間にか彼女の手が止まつていた。声には、泣いているようにさえ聞こえる震えが混じつていた。

「泥だらけのフェオさまにしがみついて、私のせいだ、って一晩中。イヴアさんにも、何で離れたんだって、みつともなく当たり散らして。あのロゼさんがですよ？」

いや、違う。

怒りだ。私に対しての、怒りだ。

「それからフェオさまには、このことは言わないでくれって。フェオさまは心配されたり同情されたりするのが、一番嫌いだから言わないでくれって。ロゼさん、泣きながらそう言つたんです」

「……そう

私はただ頷くしかできなかつた。開いた視界は、のぼせて、ぼやけていた。

「それで今日の決闘騒ぎです。何重にも何重にも厳重に魔法施錠を掛け、それでも心配そうにロゼさん、学校に向かつて、放課後の掲示板いっぱいに、それが張られてたんです。それを見たロゼさん、一体、どんな気持ちだったと思いますか、フェオさま？」

「……」

あいつ。

「いとも簡単に破られて侵入された挙句、よりもよつて決闘ですよ？ ロゼさんからしたら、力の無さを嫌といつほど実感させられて、その上フェオさまから見捨てられたように思つたはずです。

最後に、やつきのフュオさまの言葉

イルマは、そこで一旦、言葉を切つた。抑えきれない怒りを、無理やり抑え込むように、私に告げた。

「フュオさま。あたしですら気付いたこと、ロゼさんが気付かないことも思つたんですか。イヴアさんは生真面目で優しくきて、気付こうとしなかつた、ようですけど」

「気付こうとしなかつた。

氣付いた。

何を。

「死ぬ氣ですか」

「そうね」

自分で理解できないほど。

自分で意識しないほど。

答えた声は冷酷だつた。

彼女の怒りが、爆発した。

「イヴアさんが、ロゼさんが、あれだけフュオさまのことを大事に思つてゐるのに、どうしてそういうことするんですか！？ あたしなんて目じやないぐらい、フュオさまのことが好きで、大切で、守りたくて、そういう気持ちをなんであつたり踏み潰せるんですか！？」

その怒りに、私は残酷に突き放した。

「……好き？ 大切？ 守りたい？ 大事？ そんなわけないでしょ？ が。憐みと、同情と、義務と、頼まれて、仕方なしに、嫌々。そんなとこ」。それ以外の何でもないわよ」

「そう思い込もうとしてるんです！ そんなにみんなが嫌いなんですか！？ そんなに自分が嫌いなんですか！？」

「嫌いよ。大つ嫌い。決まつてるでしょ。みんな、みーんな、だい

つきら」

「なら、なんで泣いてるんですか！」

「 つ

言われて。

……気付いたわけじゃない。

そんなこと、気付かないわけがない。でも。

私は、ついに振り向き、怒鳴っていた。

「泣いてるわよ！ 悪い！？ 昨日一日中、ずっと怖い目に遭つて、なのに私はなんにも出来なくて、ずっとあんた達に縋つて縋つて縋つて！ 自分から縋らうとしたはずなのに、惨めで情けなくて一人で勝手に八つ当たりして、一人で勝手に落ち込んで、一人で勝手に迷惑かけて！」

本当に、惨めで、情けない、負け犬。

とうとう、こんな醜い内側を晒してしまった。もはや、隠しきれないほど暴き出してしまった。

もう、止まらない。

「 こんな人間なんて、私なんて、ひとつと死ぬべきなのよ…」

そして。

バチンっ ！

何ということはない。ただ単に、イルマが私をぶつたのだ。それはそうだろう。私の言っていることが無茶苦茶だからである。激怒するのも無理はない。

頬が痛かった。目も痛い。びっくりするほど泣いていた。鼻水まで出てた。

たつた一日、周りから魔法をぶつけられ、からかわれただけで、ごらんの有様である。大きさにもほどがあり過ぎる。引きこもり負け犬の精神力は、ナノサイズ。

と。

「 やつと……本音を言いましたです」

ぶたれて顔を下げる、私の耳に入ったのは優しげなイルマの声。

「 ……え」

ふと、視線を上げた私の目に映るのは、本当に満面の笑みを浮かべた彼女の顔と。

はりと、落ちたタオルに隠された、舐めやかしい女の子の

裸。

「…………あー」

潤んだ視界で、じっくり、上から下まで眺めて。それから自分の方も見やる。やはりタオルは外れていて、白い艶やかな肌が全て露出していた。そちらも一通り視姦して。

「満点。文句なし」

呟いた瞬間、決定的な何かが外れて、いきなり視界が赤く染まつた。それが鼻血だと気付いた時には、私は気を失っていた。

その後、私が目覚めたのはきっかり一時間後。イルマにパジャマを着せられて、ベッドに横たわつての目覚めだつた。このパターン、二度目である。

それで今、夕食も終えた私達は、作戦会議をしているのであつた。「フュオさま、前も言いましたけど、魂^{アーマ}がない、なんてありえないんですう！」

「…………そう言われても、実際、私まったく使えないし」

ややふて腐れたような口調になつてしまつ。

「そう思い込んでるんじゃないですか？」

言しながら、同じベッドの隣に腰掛けたイルマちゃんが、ずいっ、と私の顔の前に身を乗り出してくる。

「お、思い込む？ て、ていうかイルマちゃん、近いんだけど……」「魔法というのは、まず信じることが大事なんです！ 自分が魔法を使える、世界が生命に満ちている、身体に魂^{アーマ}があるって、信じなければダメなんです！」

「…………そ、そ、そ、う、な、ん、だ、一、イ、イルマちゃん、離れてくれない、か、な？」

次は私の身体にのしかかつて、押し倒していく。あの風呂場以降、

完全に力関係が逆転していった。

「 つて、わああつ！？ ボタン取るなあああ！」

押し倒して、勝手にパジャマのボタンを外し初めっていた。押し返してみるものの、完全魔法強化中。 この子やつぱり、ずっと関節技わざと受けたみたいです。それでさつきから趣向が変わっちゃつたようです。その、待ちから攻め的、な？

「 まずはその一環として、性感に身を悶えさせて、ちゃんと生きていることの実感を得て貰おうと思います！」

「ええつ！？ なにそれ意味わかんないし！ 全然あんたの欲望丸出しだし！」

「 ほら、人間つて食欲、睡眠欲、性欲の三大欲求みたいのあるじゃないですか。 そのうちの一つを活性化させて『生きてるよー！』つていうのを確かめて、『おお、私魂あつたんだー！』つてなるわけです！」

「 ならないわよつ！」

イルマちゃん、完全に暴走していた。よつぽど私が鼻血出して倒れたのが嬉しかつたらしかつた。ようするにこの子、私がそっち方面OKだと確信したみたい。

…… 実際どうなんだろう。これ、昨日も考えた気もするけど。まあともかく。

私、死ぬ氣で抵抗していた。

「 いにやあつ！ イルマちゃん、やめて！ お願いしますやめてください！ やめろつて言つてんだるーがこのガチレズ女あああつ！」

「 おお！ いいです！ 男口調フニオさまいいです！ そそります！」 お嬢様ヤクザつて新しい世界の可能性が見えました！

「 つるさい、見なくていいわよ！ つて、あ、やめて、脱がすな、本当、まじで、お願ひ 舌かむ！ それ以上脱がしたら舌噛んで死んでやる！」

そこまで言つて、やつと諦めてくれたイルマちゃん。「ふうー。

仕方ないです」「なぜか私が悪いみたいな言い方をしながら、やつと離れてくれた。

「まあ、でも、信じるのが大事つてのは本当ですよ？　学校でも一番最初に言わることなんですよ」

かなり息を切らしながら、身なりを整える私とは打って変わり、息一つ切らさず、平然と彼女が言つ。

「魔力^{アーマ}つて目に見えないですから。見えないものを信じる、つてところから始めるんです」

「……ふーん……」

そんなこと、初等で言つてたつけ。私、つぐづぐから授業とか

聞いてなかつたんだなあ、と感心してしまつ。

「やつぱり、この『信じる』つてのが一番フェオさまに足りないものだと思います！」

いきなりテンションマックスで、勢いよく立ち上がり決めポーズを取る。私は半眼でその様子を眺めていた。

「魔法を信じる！　魔力^{アーマ}を信じる！　魂を信じる！　自分を信じる

！　世界を信じる！」

一つ一つポージング。ベッドがぎこちないで、やめて欲しかつた。

「ねえ、それは分かつたんだけど、呪文を覚えてみるつていつのはどうなつたの？」
灼熱玉^{ファイヤーボール}の呪文

夕食時に提案していたことを訊ねると、ぴたつ　とポーズしたまま静止し、それからばんつ　とベッドから飛び立ち、即座に自分の鞄から教科書（呪文とか乗つてゐやつ）を取り出して、一瞬で元の位置に戻つてきた。

……忘れてたな。

「さ、さあ、今日は一晩中付き合いますよ！　完全完璧に、寝ても口ずさめるよひにマスターしますです！」

取り繕つよひ、またテンションを張り上げるイルマちゃん。

「……まあこいにけビ

た。 一人ごちて、彼女が突き出してきた教科書を一緒に眺めるのだつ

イルマちゃんに聞くと、受け取られた時点で受理されており、もはや撤回は出来ないらしい。なら、せめてもの抵抗として、魔法を使えるようにと懇あがきをしているのである。

それにただそれだけというわけじゃない。私は、これ以上惨めな自分を晒せるほど、精神的に強い人間では、どうやらなかつたらしい。よくこれで、初等の時は頑張れたものだと呆れてしまう。

ば死。

ごめんね イルマちゃん イヴァ、口ゼ

私はこれまで、いや、今だって、他人の気持ちなど、本当にしつかりと考えたことはない。

でも、憐みと、同情と、義務と、頼まれて、仕方なしに、嫌々だとしても、私が死ぬことで、みんながいい顔をすることは、さすがに思えなかつた。

結局私は、一日中命の危険を感じた、はたまたイヴ・アが私を憐れんでいた、その腹いせをしただけなのだ。つくづく、ひねくれ者で、我が儘なお嬢様である。

「信じる、か」

「信じて」とは、必ずしも「信じる」ことの意味ではない。たとえば、
「魔術を信じて」、「魔力を感じて」、「魔力を信じて」、「魔を信じて」、「自己を信じて」など、
「信じる」の意味ではなく、必ずしも「信じて」の意味ではない。

なんだかんだで、このフレーズ、気に入つたみたいだつた。勝手

に口づせんでいたりする。

まあそれはともかく。

これ以上感傷に浸つて、一層寝不足にでもなり、明日の決闘どころでは無くなつたら笑い話にもならない。

私は自分のベッドから腰を上げ、イルマのベッドに倒れこむようにして。

やはり眠かったのだろうか、あつとこづ聞に眠りについた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7659q/>

生まれ変わっても負け犬

2011年2月26日13時56分発行